

第三百三條 證人ノ訊問ハ其一身ノ關係ニ付テノ必要ナル間ハ氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ證人ニ提出シ又必要トスル場合ニ於テハ其事件ニ於ケル信否ニ關スル情況ニ付テノ問ヲ之ニ提出スルヲ以テスル

第三百四條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知りタルモノヲ連續シテ流ヘシムル事ヲ要ス

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其了知ノ基本ヲ穿鑿スル爲メ已ムヲ得サル場合ニハ尙ホ其他ノ問ヲ發スル事ヲ要ス

第三百五條 證人ニハ其供述ノ稿本ヲ朗讀シ又ハ其他ノ覺書ヲ用ユル事ヲ許サス又證人ニハ其記憶スル事項ヲ悉ク明示シタル後始メテ書面ヲ展閱シテ其供述ヲ完全ナラシメ及ヒ之ヲ更正スル事ヲ許ス事ヲ得但證人ハ算數ノ關係ニ限り其覺書ヲ直チニ用ユル事ヲ得

第三百六條 陪席判事ハ裁判長ノ許可ヲ得テ證人ニ對シ自ラ問ヲ發

日本學術振興會
 法律部
 民事訴訟法
 第三編
 第一章
 第七節
 第七十八條

スル事ヲ得

原告被告ヲ訊問チ中斷シテ證人ニ對シ自ラ問チ發スル事ヲ得然レ伊
告被告ハ供述證人ノヲ明白ナラシムルカ爲メ要用ナリト認ムル問チ發ス
ル事ヲ裁判長ニ申立ツル事ヲ要ス

問ノ許否ニ付テハキリテハ裁判所直チニ之ヲ裁判ス調書ニハ

第三百七條 各證人ノ供述ハ完全ニ之ヲ調書記載シ且證人カ其訊問
セラル、ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セスシテ訊問セラ
レタルヤチ明記スル事ヲ要ス

裁判所書記ハ調書中其訊問及ヒ其宣誓又ハ不宣誓ニ關スル部分ヲ
證人ニ讀聞セ又ハ閱覽ノ爲メ證人ニ之ヲ提示ス

證人ハ讀聞セ又ハ閱覽ノ際變更及ヒ追加ヲ求ムル事ヲ得裁判所書
記ハ證人カ變更及ヒ追加ヲ求メタル旨ト共ニ其變更及ヒ追加ヲ調
書ノ末尾又ハ縁邊ニ附記シ之ヲ證人ニ讀聞セ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ

民新草ノ七九

證人ニ提示ス

調書ニ關シテハ第百五十四條第二項、第百五十五條及ヒ第百
五十六條ノ規定ヲ適用ス

第三百八條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ證人ノ再訊問ヲ命スル事ヲ
得

- 第一 證人カ法律上ノ規定ニ從ヒ訊問セラレサリシ時
- 第二 證人カ完全ニ訊問セラレサリシ時
- 第三 證人ノ供述カ不明又ハ兩義ナル時
- 第四 證人其モ自ラカ其供述ノ補充又ハ更正ノ爲メ訊問セラレン事
ヲ申立ツル時

第五 其他裁判所カ再訊問ヲ必要トスル時

第三百九條 左ノ場合ニ於テハ人證ヲ採ツ事ハ裁判所ノ判事又ハ區裁判所ニ人

證ヲ採ル事ヲ委任スル事ヲ得

本
條
ノ
旨
ニ
依
リ
て
之
ヲ
行
フ
ル
事
ヲ
得
ル
コ
ト
ナ
リ

第一 證人ヲ其場所ニ就キ訊問スル事カ確實ヲ探知スル爲ノ要用ナル時

第二 證人カ疾病又ハ其他ノ事由ノ爲ノ受訴裁判所ニ出頭スル事ヲ妨ケラル、時

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔シタル地ニ在リテ其受訴裁判所ニ出頭スル事カ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スヘキ時

若シ證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ出ツル事能ハサル時ハ證人ノ所在地ニ就キ訊問ヲ爲ス

第三百^七條 第二百八十七條^二、第二百八十八條^三、第二百九十五條及^二第三百^{九十七}條ニ揭ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ續テ證據ヲ述フル事ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權上ニテ若クハ原告被告ノ一方ノ申立

理由ヲ明示シテ

六月八日
議了

ニテ發セラレタル間ニ答フル事ヲ拒ム時ハ此拒絕ノ正否ニ付テノ裁判ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テラレタル間ヲ發スル事ヲ否ム時ハ原告若クハ被告ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムル事ヲ得

第三百^八條ノ場合ニ於ケル證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事^五其意見ヲ以テ立シテ之ヲ命スル事ヲ得

第三百^九條 證人ヲ申出テタル原告又ハ被告ハ其訊問ノ始マルマテハ此舉證方法ヲ拋棄スルノ權利アリ其後ノ拋棄ハ相手方ノ承諾ヲ以テノミ許サル

第三百^十條 各證人ハ日當ノ辨償及ヒ其出頭ニ付キ旅行ヲ要スル時ハ旅費ノ辨償ヲ請求スル事ヲ得又證人ハ其訊問アリタル期日ノ終リタル後直チニ其領收スルキ金額ノ確定ヲ求ムル事ヲ得

辨償
確定
求ムル事ヲ得

其確定ハ訊問ヲ指揮スル裁判所又ハ判事ヨリ費額表ニ准據シテ之
 ヲ爲ス其確定ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス
 舉證者ノ豫納シタル費用カ不足ナル時ハ證人ノ爲メ其確定シタル
 金額ヲ豫權ヲ以テ取立ツ

第五節 鑑定人ニ因レル證據

第三百十三條 申立ニ因リ又ハ豫權ヲ以テ決定セラレタル鑑定人ニ
 因レル證據ニ付テハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ
 人證ニ付テノ成規ヲ準用ス

第三百十四條 鑑定人ニ因テ證據ヲ集ケント欲スル原告又ハ被告ハ
鑑定スヘキ事項
 適當ノ人ヲ申立ツル事ヲ要ス

假
 立會ハシムヘキ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ
 爲ス裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名ニ制限シ又何時ニテモ既ニ任命
 セラレタル者ニ代ヘテ他ノ鑑定人ヲ任命スル事ヲ得

同
 裁判所ハ原告被告ニ對シ適當ナル人ヲ共同シテ申出ツル事ヲ催告
 シ且之カ爲メ相當ノ期間ヲ許與スル事ヲ得

第三百十五條 左ノ者ハ鑑定ヲ命セラレタル職務アリ入タル者

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メ公ニ任セラレタル者

日本
 法律
 第三
 卷
 第三
 百
 十五
 條

第三百十四條^一及ヒ第三百十九條^五ノ第一號并ニ第二號ノ規定ニ依リ
受訴裁判所ニ屬スル權ヲ行フ

第三百十七條^七 鑑定人ハ日當、旅費及ヒ立替金ノ辨償ヲ請求スル
事ヲ得

此場合ニ於テハ第三百十九條^九ノ規定ヲ準用ス

第三百二十條^八 實驗ノ爲メ特別ノ知識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ情
況カ其知識アル者ノ訊問ニ因テ確定セラルヘキ時ハ證ニ付テノ成

規ヲ適用ス

第六節 書證

第三百二十三條 官廳カ其職權ノ範圍内ニ於テ又公證ヲ爲スノ權ア
ル人カ其委任セラレタル職務ノ範圍内ニ於テ定式ニ從ヒ作りタル
證書(公證書)ハ下ノ數條ノ詳細ナル規定ニ依リ其旨趣ノ完全ナ
ル證據ヲ成ス

三百十九條
ノ申出
ハ正テ
爲シテ
出ス

第三百二十四條 官廳ヨリ發シタル證書カ官府ノ布令、命令又ハ裁
決ヲ包含スル時ハ其證書ハ此布令、命令又ハ裁決ノ發付アリタル
事ヲ證ス

第三百二十五條 官廳ニ於テ又ハ公證ヲ爲ス人ノ面前ニ於テ爲シタ
ル陳述ニ付キ證書カ作ラレタル時ハ其證書ハ記載セラレタル情況
ヲ證ス

第三百二十六條 官廳又ハ公證ヲ爲ス人ノ作りタル證書カ前二條ニ
記載シタルヨリ他ノ事實ヲ證スル時ハ其證書ハ其事實ノ眞實ナル
事ヲ證ス

然レ供證據カ官廳又ハ公證ヲ爲ス人ノ固有ノ實驗ニ基カサル時ハ
證書ハ法律上ノ成規ニ依リ證據ノ効力ヲ固有ノ實驗ニ對ラシメサ
ル場合ニ限り證據力ヲ有ス

第三百二十七條 前二條ノ場合ニ於テ證書ニ其遵守ヲ證シタル方式

民事訴訟法

カ實際遵守セラレサル事又ハ官廳若クハ公證ヲ爲ス人カ故意、錯
誤若クハ其他ノ理由ニテ不正ニ記載ヲ爲シタル事ヲ主張シタル時
ハ此主張ニ付キ證據ヲ述フル事ヲ許ス

（第三百二十八條 第三百二十五條及ヒ第三百二十六條ノ場合ニ於テ
證書ハ官廳若クハ公證ヲ爲ス人ノ管轄違ナル爲メ又ハ方式ニ欠缺
アル爲メ公證書タルノ効力ヲ有セサルモ私證書タルノ證據力ヲ有
スル事ヲ妨ケラレス

（第三百二十九條 私證書ハ其作成人署名捺印シタル限りハ權利行爲
ニ付キ之ニ記載シタル陳述ノ爲メ完全ナル證據ヲ成ス

（第三百三十條 私證書ニ記載セラレタル陳述力權利行爲ヲ包含セサ
ル限りハ作成人自身、其相續人又ハ其他ノ承繼人及ヒ第三者ニ對
シ證據力ヲ有スヘキヤ否又其證據力ヲ有スルノ程度ハ其場合ニ隨
ヒ裁判所之ヲ判斷ス

民事草ノ八四

（第三百三十一條 竄削、挿入、抹殺又ハ其他ノ表見上ノ欠缺カ證書
ノ證據力ノ全部又ハ一分ヲ廢滅セシムルノ限度ハ裁判所其自由ナ
ル心證ヲ以テ之ヲ裁判ス

第三百三十二條 原告被告ノ各方ハ其證據方法トシテ用ヒシトスル其
所持ノ證書ヲ口頭辯論ノ際裁判所ノ命ニ因リ裁判所ニ提出シ且其
提出ノ爲メ之ヲ準備シ置ク事ヲ要ス

舉證者カ證書ヲ提出セサル時ハ採證決定ヲ以テ其提出ヲ命ス然レ
供舉證者カ其提出セサリシ事ヲ充分ナル理由ヲ以テ辨解セサル時
ハ新ニ定ノラルヘキ期日ノ費用ハ舉證者ノ負擔ニ歸ス
舉證者カ證書ヲ新期日ニ於テモ亦提出セサル時ハ第二百八十七條
第二項ノ規定ヲ適用ス

民事訴訟法草案

第十七回

目
次
第一編
第一章
第二章
第三章
第四章
第五章
第六章
第七章
第八章
第九章
第十章
第十一章
第十二章
第十三章
第十四章
第十五章
第十六章
第十七章
第十八章
第十九章
第二十章
第二十一章
第二十二章
第二十三章
第二十四章
第二十五章
第二十六章
第二十七章
第二十八章
第二十九章
第三十章
第三十一章
第三十二章
第三十三章
第三十四章
第三十五章
第三十六章
第三十七章
第三十八章
第三十九章
第四十章
第四十一章
第四十二章
第四十三章
第四十四章
第四十五章
第四十六章
第四十七章
第四十八章
第四十九章
第五十章
第五十一章
第五十二章
第五十三章
第五十四章
第五十五章
第五十六章
第五十七章
第五十八章
第五十九章
第六十章
第六十一章
第六十二章
第六十三章
第六十四章
第六十五章
第六十六章
第六十七章
第六十八章
第六十九章
第七十章
第七十一章
第七十二章
第七十三章
第七十四章
第七十五章
第七十六章
第七十七章
第七十八章
第七十九章
第八十章
第八十一章
第八十二章
第八十三章
第八十四章
第八十五章
第八十六章
第八十七章
第八十八章
第八十九章
第九十章
第九十一章
第九十二章
第九十三章
第九十四章
第九十五章
第九十六章
第九十七章
第九十八章
第九十九章
第一百章

三
冊
學
律
法
學
會

第三百三十一條 （證據力ノ主張ニ
平中ニ存スル時ハ證據ノ申出ハ
持ニ係ル事ヲ主張シ且相手方ニ
立ヲ爲シテ其主張ヲ證明シタル時ハ裁判所ハ相手方ニ證據ノ提出
ヲ命シ殊ニ必要トス場合ニハ採證決定ヲ以テ之ヲ命スル事ヲ要ス

第三百二十二條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證據ヲ提出スルノ義務アリ
第一 舉證者カ民法ノ成規ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證據ノ引渡又ハ
其提出ヲ求メ得ル時

第二 證據カ其包有事項ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナル時

第三百二十三條 相手方ハ其手中ニ存スル證據ニシテ訴訟ニ於テ舉
證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スルノ義務アリ其引用ヲ準備書面
中ニノミナシタル時ト雖モ亦同シ

第三百廿四條 申立ニハ左ノ條件ヲ揃ク可シ

六月九日
了

日本
法律
事務所

第一 證書ノ表示

第二 證書ニ因リ證スヘキ事實ノ表示

第三 證書ノ包有事項ノ表示

第四 證書力相手方ノ手中ニ存スル事ヲ主張スル理由タル狀況ト

申立

第五 證書ヲ提出スヘキ義務ノ生スル理由ノ表示

第三百廿五條 裁判所ハ證書ニ因リ證スヘキ事實重要ニシテ且申立

ツ理由アリト認ムル場合ニ於テ相手方其證書ノ手中ニ存スル事ヲ

自認スル時又ハ申立ニ付キ離脱セサル時ハ控訴決定ヲ以テ證書ノ

提出ヲ命ス

第三百三十四條 相手方カ證書ヲ所持セサル事ヲ申立ツル時ハ此申

立カ眞實ニ基クヤ否ヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ探繋スル爲メ

又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クルノ目的ヲ以テ故意ニテ證書ヲ隠シ若ク

ハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヲ探繋スル爲メ此章ノ第八節ノ成

規ニ從ヒ相手方^{本人}證人トシテ訊問スル事ヲ要ス

相手方カ官廳ナル時ハ證書力其廳ノ保藏ニ係ラス又其所在ヲ明示

スル事ヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ代用ス裁判所ハ此

證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ムル事ヲ要ス

第三百三十五條 證書ヲ所持スル事ヲ自認シ又ハ之ヲ所持セスト申

立テサル相手方カ其證書ヲ提出スヘキノ命ニ從ハス又ハ相手方カ

所持セスト申立テタル證書ニ付^{訊問ヲ受ケテ}證人トシテ供述スル事ヲ拒ミタ

ル時又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クルノ目的ヲ以テ故意ニテ證書ヲ隠シ

若クハ使用ニ耐ヘサラシメタル事ノ明確ナル時ハ舉證者カ證書ノ

贖本ヲ差出シタル場合ニ於テハ此贖本ヲ正當ナルモノト看做ス若

シ贖本ヲ差出サハル時ハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ包

有事項ニ付テノ舉證者ノ主張ヲ正當ト認ムル事ヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出サ

ルサレハ訴訟^{相手方}入タル官廳ニ對シ右ト同一ノ結果ヲ生ス

第三百三十六條 舉證者カ舉證ノ爲メ必要ナル證書ノ第三者ノ所持ニ係ル事ヲ主張シ且第三者ヲシテ證書ヲ提出セシムル事ノ申立ヲ爲シテ其主張ヲ證明シタル時ハ採證決定ヲ以テ第三者ニ證書ノ提出ヲ命スル事ヲ要ス

第三百三十七條 第三者ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ掲ク

- 第一 第三者及ヒ原告被告ノ氏名、身分、職業并ニ住所ノ表示
- 第二 採證決定ノ包有事項ニ從ヒ證書ヲ以テ證セラルヘキ事實及ヒ證書ノ表示
- 第三 法律ニ依リ戒示セラレタル罰ヲ避ケント欲セハ證書提出ノ爲メ又ハ其所持ニ付キ證據ヲ述フル爲メ、年月日及ヒ時ヲ以テ表示セラルヘキ期日ニ出頭スヘキ旨ノ指示

第四 裁判所ノ名稱

其他ノ訴訟手續ハ人證ニ付テノ成規ニ從フ

第三百三十八條 官廳及ヒ官吏ニハ前二條ノ規定ヲ適用セス
舉證者ニ於テ舉證ノ爲メ要用ナル證書カ官廳又ハ官吏ノ保藏ニ係ル事ヲ主張シ其主張ヲ證明シタル時ハ裁判所ハ採證決定ニ基キ證書、其謄本又ハ其包有事項ノ拔奪ヲ送致スル事ヲ其官廳又ハ官吏ニ囑託ス

○第三百廿八條 證書カ舉證者ノ主張ニ依レハ第三者ノ手中ニ在スル時ハ證書ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル爲メノ期日ヲ定ムル事ヲ申立テ、之ヲ爲ス

○第三百廿九條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ於ケルト同一ナル理由ニ因リ證書ヲ提出スル義務アリ然レ世強テ之ヲ提出セシムル事ハ既ヲ以テスルニアラサレハ爲ス事ヲ得ス

日本
法律
學
會

○第三百三十條 第三百廿八條ニ從ヒ爲スヘキ申立ヲ證明スルニハ第三百廿四條第一號乃至第三號及ヒ第五號ノ要件ヲ踐ミ日證書カ他人ノ手中ニ存スル事ヲ證明スルヲ要ス

○第三百三十一條 證書ニ因リ證スヘキ事實重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スル時ハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ定ムル事ヲ要ス
第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタル時又ハ無證者カ訴ノ提起訴訟ノ繼續又ハ強制執行ヲ遲延シタル時ハ相手方ハ前項ノ期間満了前ニ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ル事ヲ得

○第三百三十二條 證書カ無證者ノ主張ニ依レハ官廳又ハ公吏ノ手中ニ存スル時ハ證書ノ申出ハ證書ノ送付ヲ公廳公吏ニ囑託アラシムル事ヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス
此成規ハ原告被告カ法律ノ成規ニ從ヒ裁判ノ助力ナクシテ取寄スル事ヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス

公廳又ハ公吏第三百廿二條ニ基キ證書ヲ提出スル義務アル場合ニ於テ之ヲ取付スル事ヲ拒ム時ハ第三百廿八條乃至第三百三十一條ノ規定ヲ適用ス

○第三百三十三條 採證決定ヲ爲シタル後其決定中ニ揚ケタル係争事實ニ付第三百廿八條第三百三十二條ニ從ヒ證書ヲ申出テタル場合ニ於テ證書ヲ取寄スル爲ノ必要ナル手續ニ因リ争訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ルヘク且裁判所原告又ハ被告カ訴訟ヲ遲延スルノ故意ヲ以テ又ハ其タシキ怠慢ニ因リ證書ヲ更ニ早ク申出テサリシ事ノ心證ヲ得タル時ハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スル事ヲ得

第三百三十九條^四 口頭辯論ノ際證書^ヲ提出^{スルニ於テハ}其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ其他ノ顯著ナル障礙アル時ハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出スル事ヲ命スル事ヲ要ス
受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ又證書ノ一分

日本法律家協會

ノミ要用ナル時ハ第百~~三~~^六十八條第二項ノ成規ニ從ヒ作ラレタル拔
書ヲ調書ノ附録トシテ之ニ添附スル事ヲ要ス

第三百~~四~~^三十五條 公證書ハ正本又ハ認證セラレタル謄本ヲ以テ之ヲ提
出スル事ヲ得然レ供裁判所ハ舉證者カ正本ヲ提出スル事ヲ命スル
事ヲ得

私證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出スル事ヲ要ス若シ原告被告カ未タ提
出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ^レ證書ノ効力又ハ其解釋ニ付
キ争ヲ爲ス時ハ其謄本ヲ以テ足ル然レ供裁判所ハ^此場合ニ於テモ
舉證者カ原本ヲ提出スル事ヲ職權ヲ以テ命スル事ヲ得
提出シタル謄本ニ代ヘテ正本又ハ原本ヲ提出スヘキノ命ニ從ハサ
ル時ハ裁判所ハ如何ナル證據力ヲ謄本ニ付スヘキヤチ自由ナル心
證ヲ以テ裁判ス

第三百~~四~~^三十六條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後相手方ノ承認ヲ以テ

メアラレシ方法ヲ拋棄スル事ヲ得ス

第三百四十二條 方式及ヒ包有事項ニ因リ公證書トシテ顯ハル、證
書ハ真正ナリト推定セラル但反證ハ之ヲ許ス

裁判所ハ證書ノ真正ナル事ヲ疑フ時ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ
其證書ニ署名捺印シタル官廳又ハ公證ヲ爲ス人ヲシテ其真正ナル
事ニ付キ陳述ヲ爲サシムル事ヲ得

裁判所ハ外國ニ於テ作りタル證書ニシテ公證書ト稱スルモノヲ詳
細ナル證明ナクシテ真正ト認ムヘキヤ否チ其場合ノ情況ニ隨ヒ判
定スル事ヲ要ス然レ供外國駐劄ノ本邦ノ公使又ハ領事ノ保證アル
時ハ其證書ノ真正ナル事カ確實ト看做サル

○第三百三十七條 公證書又ハ檢査ヲ經タル私證書カ偽造若クハ變造
セラレタルモノナリト主張スル者ハ其證書ノ真正ニ付キ確定アラン
事ノ申立ヲ爲ス事ヲ要ス

六月十五日
了

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判
ヲ爲ス事ヲ要ス

第三百四十三條 相手方ノ承認セサル私證書ノ眞正ナル事ハ之ヲ證
スル事ヲ要ス

然レ供作成人ノ署名捺印ノ眞正ナル事カ確實ナル時ハ署名捺印ノ
前ニ存スル記載ハ眞正ナリト推定セラル但反證ハ之ヲ許ス

第三百三十八條 私證書ノ眞正ニ付キ争アル時ハ裁判所ハ舉證者ノ
申立ニ因リ檢査ヲ爲ス事ヲ得

第三百四十條 三九私 證書ノ眞否ハ總テノ適法ノ舉證方法及ヒ筆跡若
クハ印章ノ對照ニ因テ之ヲ舉タル事ヲ得

筆跡若クハ印章ノ對照スル爲メ證 書ノ眞否ノ證ヲ舉クル原告又ハ被告ハ適當
ノ書類ヲ提出スル事ヲ要ス

眞正ナル事カ自認セラレ又ハ證セラレタル適當ノ對照書類ナキ時

未定

未定

未定

判

ハ其手書ヲ爲スヘキ原告又ハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ定マリタル
語辭ヲ書セシムル事ヲ命スル事ヲ得其書シタル語辭ハ證書ノ附録
トシテ之ニ添附スル事ヲ要ス

裁判所ハ手書對照ノ結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ又適當トスル
場合ニハ鑑定人ヲ審訊シタル後裁判ス

原告又ハ被告カ對照スヘキ語辭ヲ書スヘキ裁判所ノ命ニ十分ナル
辨解ナクシテ從ハサル時又ハ書様ヲ變シテ手書ヲ爲シタル時ハ證
書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ確實ナ
リト看做サル

第三百四十五條 證書ニシテ何人ニテモ其筆跡又ハ署名捺印ノ眞否
ヲ最早證明スル事能ハサル程古キモノハ裁判所自由ナル心證ヲ以
テ之ヲ眞正ト認ムル事ヲ得

第三百四十六條 提出セラレタル證書ハ直チニ之ヲ覆付シ又適當ト

日本
法律
學
會
刊

スル場合ニハ其證本ヲ記録ニ留メテ之ヲ還付ス

然レ供證書カ偽造又ハ變造ナリトシテ争ハレタル時ハ檢事局ノ承

斷アルニ非ヤレハ之ヲ還付スル事ヲ得ス

第三百四十七條 公證書ノ真正ナラサル事又ハ其變造若クハ偽造ナ

ル事ヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告又ハ被告ニハ其罪意若クハ重

過失ノ實アル時ハ五十圓以下ノ罰金ヲ科ス

又私證書ノ眞正ナル事ヲ眞實ニ反キテ争フ時ハ前項ト同一ナル條

件ヲ以テ二十圓以下ノ罰金ヲ科ス

第三百四十八條 此節ノ規定ハ事件ノ本性カ許ス限りハ其他事跡ノ

記念又ハ權利ノ證據ノ爲メ作りタル制符界標等ノ加キ記念物ニモ

之ヲ準用ス

第七節 檢證ニ因レル證據

第三百四十三條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證スヘキ事實ヲ

明示シテ之ヲ爲ス

第三百四十九條 申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ決定シタル檢證ハ其檢

證スヘキ物ヲ訟廷又ハ裁判所内ニ搬致シ得ヘキ時ハ受訴裁判所カ

口頭辯論ノ際之ヲ爲ス

其物カ不動産ナル時又ハ動産ニシテ裁判所内ニ之ヲ搬致スル事ヲ

得ス若クハ其搬致力不相應ノ時日若クハ費用ヲ要スヘキ時ハ其所

在地ニ就キ檢證ヲ爲ス事ヲ受訴裁判所ノ判事又ハ區裁判所ニ委任

ス

檢證セラルヘキ物カ受訴裁判所ノ所在地ニ在ル時ハ受訴裁判所ノ

全員カ其物ノ所在地ニ臨ム事ヲ得

第三百五十條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ヲ立會ハシム

ヘキ事ヲ命スル事ヲ得此場合ニ於テハ此章ノ第五節ノ規定ヲ適用ス
「受審裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スル事ヲ得」

第三百五十一條 檢證物ヲ準備シ置クヘキ舉證者ノ義務及ヒ舉證者カ相手方又ハ第三者ニ於テ檢證物ヲ所持スル事ヲ主張シタル時其檢證物ヲ出示スヘキ相手方又ハ第三者ノ義務ニ付テハ第三百三十二條以下ノ規定ヲ準用ス

第三百五十二條 檢證ヲ爲スノ際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニシ又必要トスル場合ニハ調書ノ附録トシテ添附スヘキ圖面ニ因リ之ヲ明確ニスル事ヲ要ス
若シ圖面カ既ニ記録中ニ存スル時ハ檢證物ト之ヲ對照シ必要トスル場合ニハ之ヲ更正スル事ヲ要ス

第八節 原告被告ヲ證人トシテ訊問スル事ニ因レル證據
第三百五十三條 裁判ノ爲メ要用ナル係争事實ニ付テノ證ハ原告被告

若シ證人トシテ訊問スル事ニ因テモ亦之ヲ棄ツル事ヲ得然レ供此舉證ハ原告被告ノ其他ニ供出シタル適法ノ證ニ依ルモ其結果力證スヘキ事實ノ眞否ニ付キ裁判所ノ心證ヲ生セシムルニ足ラサル時ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告又ハ被告ノ本人ヲ訊問スル事ヲ得
ニ限リ第二百六十一條第二項、第二百六十二條第三項及ヒ第三百三十四條ノ規定ヲ留保シテ申立ニ因リ之ヲ許シ又ハ職權ヲ以テ之ヲ決定スル事ヲ得

第三百五十四條 原告被告ヲ證人トシテ訊問スル事ニ因レル證據ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ人證ニ付テノ成規ヲ準用ス

第三百五十五條 裁判所及原告又ハ被告ヲ證人トシテ訊問スル事ヲ決定シ且原告又ハ被告自身カ其決定ヲ冒渡ノ際在席ナル時ハ其訊問ヲ直チニ爲スヲ通例トス

原告又ハ被告自身カ在席ナラサル時ハ採證決定ノ包有事項ニ因リ訊

問ヲ爲スヘキ事實ヲ通知シテ新期日ニ之ヲ呼出ス

（第三百五十六條 第二百九十條及ヒ第二百九十一條第二號乃至第五號ノ規定ハ原告被告ヲ證人トシテ訊問スルノ際ニ之ヲ適用セス

（第三百五十七條 争アル事實ニ付キ舉證ノ義務アル原告又ハ被告ハ最初ニ證トシテ之ヲ訊問スルヲ通例トス

然レ供原告被告ヨリ一致シテ申立ツル時又ハ眞實ヲ探知スル爲ノ要用トスル時ハ最初ニ相手方ヲ訊問スル事ヲ得

（第三百五十八條 原告被告ノ各方ハ第三百六十一條第二項ノ規定ヲ留保シテ相手方ノ訊問後ニ己モ亦證人トシテ訊問ヲ受クル事ヲ求ムル事ヲ得

原告又ハ被告ヲ訊問シタル後裁判所ノ心證ニ於テ最初ニ爲シタル訊問ニテハ其證スヘキ事實カ十分確實ナラストスル時ハ職權ヲ以テモ亦相手方ノ訊問ヲ決定スル事ヲ得

（第三百五十九條 舉證ノ義務アル原告又ハ被告カ證據ヲ述フル事ヲ拒ミ且其拒絕カ至當トセラレタル時ハ裁判所ハ原告被告ヲ證人トシテ訊問スル事ニ因レル舉證ヲ全ク許サス又ハ相手方ノミチ訊問スヘキヤヲ其場合ノ情況ニ隨ヒ判定ス
裁判所カ舉證ノ義務アル原告又ハ被告ニ於テ争アル事實ヲ知り得サリシ事ノ心證ヲ得タル時ハ亦同シ

（第三百六十條 證人トシテ訊問セラルヘキ原告又ハ被告ニハ爾後證人タルノ資格ニテ供述スヘク其偽證ノ場合ニ於テハ刑事上訴追セラルヘキ事ヲ宣誓前ニ明告スル事ヲ要ス

（第三百六十一條 原告又ハ被告ハ證人トシテ訊問ヲ受クル前ニ宣誓スル事ヲ要ス

然レ供裁判所カ原告又ハ被告ヲ宣誓セシメテ訊問シタル後相手方ヲモ亦證人トシテ訊問スル事ヲ決定シタル時ハ訊問ノ終結スルマ

テ相手方ノ宣誓ヲ止ノ且其爲シタル供述力全ク不信實ナル事ノ顯
ハル、場合ニ於テハ其宣誓ヲ爲サシメサル事ヲ得

第三百四十八條 訊問ヲ受クヘキ原告被告ハ供述ノ稿本又ハ其傳
書ヲ用ユル事ナクシテ答辯ス可シ (假聽定)

第三百六十二條 原告若クハ被告ハ被訴者證人トシテ裁判所ニ出頭セシム
ル爲メ又ハ之ヲシテ證據ヲ述ヘシムル爲メ過料ヲ負擔シ又ハ本人
ヲ引致スル事入之ヲ許サス

原告若クハ被告力十分ナル理由ナクシテ證據ヲ述^供ヲル事ヲ拒ミ又
ハ證人トシテ訊問セラル^ノ爲メ定メラレタル期日ニ出頭セサル時
ハ裁判所ハ其意見ヲ以テ宣誓ノ上ノ訊問ニ因テ舉證スヘキ相手方
ノ主張ヲ正當ト認ムル事ヲ得

第三百六十三條 訴訟無能力者ノ法律上代人カ爭訟ヲ爲ス時ハ法律
上ノ代人若クハ既ニ滿十六歳ト爲リタル者ニ限り訴訟無能力者ヲ

六月十六日
終了

證人トシテ訊問スヘキヤ又ハ此兩人ヲ證人トシテ訊問スヘキヤヲ
決定スルハ裁判所ノ意見ニ任カサ^スル

國、府縣、郡區、町村、社寺又ハ社團カ訴訟人ナル時ハ第三百五
十三條乃至第三百六十二條ノ規定ヲ適用セス此ノ如キ訴訟人ノ法
律上代人ニ因レル舉證ハ人證ニ付テノ成規ニ從フ

法律上代人數人アル時ハ其一人ヲ訊問スヘキヤ又ハ數人ヲ訊問ス
ヘキヤヲ決定スルハ亦前項ニ同シ

日本
法律
學
會
編
纂
民
事
訴訟
法
論
義
理
學
會
編
纂
民
事
訴訟
法
論
義
理
學
會
編
纂

民事訴訟法草案

第十八回

目次
第一章
第二章
第三章
第四章
第五章
第六章
第七章
第八章
第九章
第十章
第十一章
第十二章
第十三章
第十四章
第十五章
第十六章
第十七章
第十八章
第十九章
第二十章
第二十一章
第二十二章
第二十三章
第二十四章
第二十五章
第二十六章
第二十七章
第二十八章
第二十九章
第三十章
第三十一章
第三十二章
第三十三章
第三十四章
第三十五章
第三十六章
第三十七章
第三十八章
第三十九章
第四十章
第四十一章
第四十二章
第四十三章
第四十四章
第四十五章
第四十六章
第四十七章
第四十八章
第四十九章
第五十章
第五十一章
第五十二章
第五十三章
第五十四章
第五十五章
第五十六章
第五十七章
第五十八章
第五十九章
第六十章
第六十一章
第六十二章
第六十三章
第六十四章
第六十五章
第六十六章
第六十七章
第六十八章
第六十九章
第七十章
第七十一章
第七十二章
第七十三章
第七十四章
第七十五章
第七十六章
第七十七章
第七十八章
第七十九章
第八十章
第八十一章
第八十二章
第八十三章
第八十四章
第八十五章
第八十六章
第八十七章
第八十八章
第八十九章
第九十章
第九十一章
第九十二章
第九十三章
第九十四章
第九十五章
第九十六章
第九十七章
第九十八章
第九十九章
第一百章

第九節 證據メ保全

第三百六十一條 證據方法ヲ失ヒ又ハ將來之ヲ使用シ難カルヘキ恐

アル時ハ^者爭訟メ經過中ナルト其起始前ナルト^{申立}申立ニ因リ

證據保全ノ爲ノ證人若クハ鑑定人ヲ訊問シ又ハ檢證ヲ爲ス事ヲ得

第三百六十五條 爭訟カ既ニ繫屬ト爲リタル時ハ其申請ハ受訴裁判

所ニ之ヲ爲ス事ヲ要ス。切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ其訊問セラ

ルヘキ者ノ現在地又ハ檢證セラルムキ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁

判所ニ申請ヲ爲ス事ヲ得 前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲ス事ヲ

右ノ區裁判所ハ爭訟カ未タ繫屬ト爲ラサル時ハ區屬管轄ヲ有ス要ス

其申請ハ書面又ハ口頭ニシテ^シ又ハ裁判所書記ニ口述シテ其證書ヲ作ラシムル

第三百六十六條 申請ハ左ノ諸件ヲ包含スル事ヲ要ス

第一 相手方ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第二 探證カ爲サルヘキ事實ノ表示

日本
法律
協會
編輯

第三 舉證方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人^ノ訊問^{ヲ爲ス}セラレヘキ時ハ其氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第四 舉證方法ヲ失ヒ又ハ將來之ヲ使用シ難カルヘキ恐アル時ハ其理由ヲ表明傾其理由ハ疏明スル事ヲ要ス

第三百六十七條^五 申請ニ付テハ應^四メ口頭辯論ヲ經スシテ決定ヲ爲ス事ヲ要ス

申請^ヲ力^{スル}許容^セラレタル時ハ採證^ヲ爲スヘキ事實及ヒ舉證方法殊ニ訊問スヘキ證人若クハ鑑定人^ヲ指名シテ記載スヘシ此決定ニ對シテハ不服^ヲ申立ツル事ヲ得ス

第三百五十五條 採證ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請者ノ應本ヲ送達シテ相手方ヲモ權利防衛ノ爲メ呼出ス事ヲ要ス切迫ナル危險ノ場合ニ於テ相手方ノ呼出ヲ適當ナル時間ニ爲ス事ヲ得サル時ト雖モ採證ハ此力爲メ妨ケラレス

申請^ヲ許容シタル決定ニ對シテハ不服^ヲ申立ツル事ヲ得ス

第三百六十八條^五 採證ハ此章ノ第四^六節、第五^六節及ヒ第七^八節ノ成規ニ從ヒ之ヲ爲ス

採證ニ付テノ調書ハ採證ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ貯藏スル事ヲ要ス

原告被告ノ各方ハ證據審問書ヲ訴訟ニ於テ用ユルノ權利ヲ有ス受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ採證ヲ命シ又ハ既ニ採リタル證據ノ補充ヲ命スル事ヲ得

第三百六十九條^五 採證ハ第三百六十^七條ノ條件ナキ時ト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許ス事ヲ得

第三百七十條^五 申立人カ相手方ヲ指定セサル時ハ申立人自己ノ過意ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサル事ヲ疎明スル場合ニ限り其申請ヲ許ス

留保

クハ陳述ヲ爲シ得サルヘキ申立及ヒ事實上ノ主張ヲ口頭辯論ノ前ニ相手方ニ通知スル事ヲ得其通知入特別ノ方式ニ依ラスシテ口頭又ハ書簡ヲ以テ一方ヨリ他ノ一方ニ之ヲ爲ス事ヲ得然レ供原告被告ハ相手方ニ送達スル爲メ其申立及ヒ主張ヲ書面ヲ以テ裁判所ニ提出シ又ハ裁判所ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ陳述スル事ヲモ得

三六十三 口頭辯論ノ期日ハ訴訟送達トノ間ニ少ナクモ三日 場合ニ於テハ
第四百五十四條 口頭辯論ノ期日ハ訴訟送達トノ間ニ少ナクモ三日 場合ニ於テハ
期間ヲ二十四時間マテニ短縮スル事ヲ得
送達カ外國ニ於テ爲サルヘキ時ハ期間ハ情況ニ應シテ之ヲ定ムル
事ヲ要ス

第四百五十四條 原告被告ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定
ナクシテ争訟ノ辯論ヲ爲メ裁判所ニ出席スル事ヲ得
此場合ニ於テハ訴ノ提起ハ口頭ノ陳述ヲ以テ成ル
三六五 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ同時ニ且本事件ノ辯論前ニ提
第四百五十二條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ同時ニ且本事件ノ辯論前ニ提

民訴草ノ九八

出スヘキノ規定ハ裁判所ノ管轄ノ抗辯
辯論前ニ主張セラルト時ニ限り之ヲ適用ス
被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本事件ノ辯論ヲ拒ムノ權ナシ然レ供裁判
所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ右ノ抗辯ニ付キ分離シテ辯論ヲ爲
スヘキ事ヲ命スル事ヲ得
第三百六十六條 第二百廿一條ノ成規ハ區裁判所ノ裁判手續ニ之ヲ
適用セス

第四百二十三條 地方裁判所ノ管轄ニ屬スル請求力反訴ニ因テ起サ
レタル時ハ相手方ヨリ本事件ニ付キ尙ホ辯論ヲ爲スノ前ニ申立テ
タル場合ニ限り區裁判所ハ争訟ヲ地方裁判所ニ移送スル事ヲ要ス
訴ノ申立ノ權限ニ因リ其訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト
爲リタル時モ亦右ニ同シ

第四百五十七條 原告又ハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ隨

ヒ争訟關係ヲ十分明確ニスル爲ノ必要ナルモノニ限り訟廷調書ヲ以テ之ヲ明確ニスル事ヲ要ス

自認、認諾、推察及ヒ和解ハ調書ヲ以テ之ヲ明確ニスル事ヲ要ス
調書ハ區裁判所判事及ヒ裁判所書記之ヲ檢認スル事ヲ要ス區裁判所判事差支アル場合ニ於テハ裁判所書記ノ檢認ヲ以テ足ル

第三百六十八條 訴ヲ起サントスル者ハ和解試ノ爲メ請求ノ目的物ヲ明示シテ相手方ヲ其普通裁判權ヲ有スル區裁判所ニ呼出スヘキ事ヲ申立ツル事ヲ得其申立ハ書面ヲ以テ又ハ書面ニ口述シテ其調書ヲ作ラシメテ之ヲ爲ス事ヲ得

當事者双方出頭シ和解力調ヒタル時ハ調書ヲ以テ之ヲ明確ニスル事ヲ要ス
和解力調ハサル時ハ當事者双方ノ申立ニ因リ其争訟ニ付キ直チニ

辯論ヲ爲ス此場合ニ於テハ訴ノ提起ハ口頭ノ推察ヲ以テ之ヲ爲ス

相手方カ出頭セス又和解試カ効力ナキ時ハ之カ爲メ生シタル費用ハ争訟ノ費用ノ一分ト看做サル

第二節 督促手續

第三百六十九條 「通常メ訴訟手續ニ於テ訴訟セラルヘキ請求カ一定ノ金額ノ支拂又ハ其他ノ代補物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル場合ニ於テ 債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラシテ提起ニ據ヘテ督促手續ニ依リ條件付ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發スル事ヲ其他管轄メ區裁判所ニ申立ツル事ヲ得

申請ノ包有事項ニ從ヒ 請求ノ主張カ夫々爲サレサル反對給付ニ整ル時又ハ支拂命令書メ送達カ外關ニ於テ若クハ公示 送達ニ因テ爲サレヘキ時ハ督促手續ニ依ル事ヲ許サス

第三百七十條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス

此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ物ニ付テノ管轄カ制限セラレサリシ

文意不明ニ付再調

モノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判
又ハ物上裁判ノ屬スヘキ區裁判所ノ管轄ニ環ス

第四百二十六條 支拂命令ヲ發スル事ノ申請ハ審問又ハ口頭ヲ以テ
之ヲ提出スル事ヲ得

其申請ハ左ノ諸件ヲ包含スル事ヲ要ス

第一 請求ノ數額若クハ其目的物ノ明示及ヒ其理由ノ表示又請求
カ數額ヨリ成ル時ハ其各項ノ數額若クハ其目的物及ヒ理由

第二 支拂命令ヲ發スル事ノ申立

第四百二十七條 裁判所ハ申請ヲ實質上調査シ其申請力前二條ノ規
定ニ適當セス又ハ申請者ノ明示ニ因リ請求力總テ若クハ現時理由
ナキ事ノ顯ハル、時ハ其申請ヲ却下ス

支拂命令カ請求ノ一分ノミニ付キ發スル事ヲ得サル時ハ亦却下チ
爲ス事ヲ要ス然レ供數額ノ請求中成ルモノカ理由ナクシテ其他ノ

モノカ理由アリト見ユル時ハ其理由アリト見ユルモノニ付キ申請
ヲ許容ス

却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス然レ供債權者ハ督
促手續ニ適セスト認ノラレタル請求ヲ通常ノ訴訟手續ニ於テ追行
スル事ヲ得

第四百二十八條 支拂命令ハ豫ノ債務者ヲ審訊スル事無クシテ之ヲ
發ス

支拂命令ハ第四百二十六條第一號ニ掲ケタル申請ノ要件ト即時ノ
強制執行ヲ避ケント欲セハ送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求及
ヒ數額ヲ以テ表示セラルヘキ其手續ノ費用ヲ債權者ニ辨償スヘク
又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツヘキ事ノ債務者ヘノ命令トヲ包含ス

第四百二十九條 權利拘束ノ効力ハ支拂命令書ヲ債務者ニ送達スル
ヲ以テ始マル

第四百三十條 異議ヲ申立ツルニハ債務者カ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立ツル事ヲ書面又ハ口頭ニテ闡述スルヲ以テ足ル但其理由ノ明示ハ之ヲ要セス

第四百三十一條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツル時ハ支拂命令ハ其効力ヲ失ヒ權利拘束ノ効力ハ存續ス然レ供異議カ特ニ數箇ノ請求中ノ或ルモノトミニ對シ申立テラルル時ハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ効力ヲ存ス

事件カ區裁判所ニ屬スル時ハ口頭辯論ノ期日ハ第四百十八條及ヒ第四百二十條ノ規定ニ從ヒ之ヲ定ム其然ラサル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル事ヲ債權者ニ通知スル事ヲ要ス債權者ハ右最後ノ場合ニ於テ通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シテ一个月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ス事ヲ要ス若シ之ニ違フ

時ハ權利拘束ノ効力ハ消滅ス

第四百三十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ發生スヘキ爭訟ノ費用ノ一部ト看做サル

第四百三十三條 債務者カ法律ノ期間内ニ於テ異議ヲ申立テサル時ハ支拂命令ハ確定シタル關際判決ノ効力ヲ得

債權者ニハ異議ノ申立ナキ事ヲ通知スル事ヲ要ス債權者カ通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シテ三个月ノ期間内ニ支拂命令書ノ執行力アル正本ヲ求メサル時ハ支拂命令ハ權利拘束ノ効力ノ消滅ト共ニ其効力ヲ失フ

第四百三十四條 時期ニ後レテ申立テラレタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

却下ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第四百三十五條 異議ノ期間ヲ懈怠シタル債務者ハ左ノ場合ニ於テ

七日ノ期間内ニ非常異議ヲ申立ツルノ權アリ

第一 債務者カ天災又ハ其他難クヘカラサル事變ニ因リ法律上ノ期間内ニ異議ヲ申立ツル事ヲ妨ケラタル時

第二 債務者カ其過愆ニ非スシテ支拂命令書ノ送達ヲ知ラサリシ時

非常異議ニハ第四百十三條乃至第四百十五條ノ規定ヲ準用ス

第四百三十六條 支拂命令ヲ發スル事ノ申請及ヒ異議ノ申立ハ原本ヲ以テ相手方ニ之ヲ通知スル事ヲ要セス

第四百三十七條 債權者ノ爲メ支拂命令ヲ發スル事ヲ求メ又ハ債務者ノ爲メ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立ツル第三者ハ其委任ヲ證スル事ヲ要セス

第三節 和解手續

第四百三十八條 地方裁判所又ハ區裁判所ニ訴力起サレヌ又督促手

續ニ於テ支拂命令ヲ發スル事カ申立テラレサル間ハ原告被告ノ各方ハ其地管轄ノ區裁判所ニ和解ノ試ヲ申立ツルノ權利ヲ有ス

民事訴訟法草案

第十九回

三
本
學
術
表
現
會

三
本
學
術
表
現
會

第四百三十九條 和解試ヲ爲ス事ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得其謄本ハ相手方ニ付與スル事ヲ要セス
其申請ハ左ノ諸件ヲ包含スル事ヲ要ス

第一 原告被告ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第二 争訟物ノ明示

第四百四十條 和解試ノ爲メノ原告被告ノ呼出狀ニハ前條ニ掲ケタル申請ノ要件及ヒ期日ニ本人出頭スヘキ事ノ催告ヲ掲ク

申請ヲ自ら提出スル原告又ハ被告口頭ヲ以テ之ヲ呼出シ且其交付セラルヘキ呼出狀ヲ相手方ニ送致スル事ヲ之ニ委任スル事ヲ得

第四百四十一條 原告被告ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ和解辯論ノ爲メ裁判所ニ出頭スル事ヲ得

第四百四十二條 裁判所ハ和解辯論ニ於テ代人ヲ許サス但代人ヲ出シタル原告又ハ被告ノ出頭セサル事ヲ充分ニ辯解セラル、時ハ此

限ニ在ラス

第四百四十三條 裁判所ハ原告被告雙方ノ申立ニ因リ證人及ヒ鑑定人ヲ訊問シ又ハ檢證ヲ爲ス事ヲ得

第四百四十四條 和解力調ヒタル時ハ調書ヲ以テ之ヲ明確ニスル事ヲ要ス

原告被告ノ一方カ出頭セサル時又ハ和解試力調ハサル時ハ其事ノミチ調書ニ記スル事ヲ要ス

第四百四十五條 原告被告ノ一方カ出頭セサル時又ハ和解試力調ハサル時ハ和解試ノ費用ハ發生スヘキ争訟ノ費用ノ一分ト看做サル

第五編 上訴

第一章 控訴

第四百四十六條 控訴ハ區裁判所及ヒ地方裁判所ノ第一審ニテ發シタル判決ニ對シ之ヲ爲ス事ヲ得

關席判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ハ故障カ許サレス且關席ノ場合存セサリシ事ヲ以テ控訴ノ理由トスル時ニ限り關席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツル事ヲ得

第四百四十七條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナキニ拘ハラズ之ヲ取下クル事ヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スルノ結果ヲ生ス

第四百四十八條 原告被告ハ定マリタル争訟ノ爲メ控訴ヲ爲サ、ルノ契約ヲ爲ス事ヲ得其契約ハ不服申立ヲ免カルヘキ裁判ヲ爲ス裁判所ニ於テ口頭辯論ノ際調書ニ之ヲ口述シ又ハ判決ヲ發スル前若

クハ其後^ニ書面ヲ以テ之ヲ取替フ事ヲ得

第四百四十九條 控訴期間ハ一个月トシ判決書ノ送達ヲ以テ始マル
但判決書送達前ノ控訴ノ提起ハ無効タリ

若シ控訴期間内ニ於テ判決力第三百八十九條ノ規定ニ從ヒ追加裁
判ヲ以テ補充セラレタル時ハ控訴期間ノ經過ハ最初ニ爲サレタル
判決ニ對スル控訴ニ付テモ追加裁判書ノ送達ヲ以テ更ニ始マル

第四百五十條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ管轄控訴裁判所ニ差出スニ因
テ之ヲ爲ス

第四百五十一條 控訴狀ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作
リ且左ノ諸件ヲ掲ケル事ヲ要ス

第一 控訴ヲ受クル判決ノ表示

第二 其判決ニ對シ控訴力起サル、事ノ陳述

第三 判決ニ對シ不服力申立テラル、程度ニ付キ定マリタル陳述

六月廿三日
了

及ヒ不服ノ理由

第四 主張スヘキ新ナル事實及ヒ證據方法ノ明示

第五 定マリタル申立

然レ其右第四號ニ掲ケタル要件ノ欠缺ハ控訴提起ノ効力ニ影響
及ホサス

第四百五十二條 控訴ノ提起ハ原告又ハ被告ヨリ第一審裁判所ニ
テ届出ツル事ヲ要ス

裁判所書記ハ届書ヲ受取りタル後控訴人ノ費用ヲ以テ記録ヲ控
裁判所ニ差出ス事ヲ要ス

第四百五十三條 許スヘカラサル事ノ判然ナル控訴又ハ法律上ノ七
式及ヒ期間ニ於テ翻サレサル控訴ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ
却下ス

却下ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第四百五十四條 前條ノ場合ノ外控訴狀ノ原本ハ十四日ノ期間内ニ

答辯書ヲ差出スヘキノ催告ヲ以テ之ヲ被控訴人ニ送達ス但廣瀾ナ
ル事件又ハ簡難ナル事件ニ於テハ期間ヲ相當ニ伸長スル事ヲ得

第四百五十五條 答辯書ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作
リ且被控訴人ノ定マリタル申立及ヒ其主張スヘキ新ナル事實并ニ
舉證方法ヲ掲クル事ヲ要ス

第四百五十六條 被控訴人ハ答辯書ニ於テ控訴ニ從屬スル事ヲ得
副席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツル事ニ付テノ規定ハ從屬
ニ因テ副席判決ニ對シ不服ヲ申立ツル事ニモ亦之ヲ適用ス

第四百五十七條 左ノ場合ニ於テハ從屬ハ其効力ヲ失フ

第一 控訴力不適法トシテ判決ヲ以テ棄却セラル、時

第二 控訴力取下ケラル、時

被控訴人カ控訴期間内ニ控訴ニ從屬シタル時ハ其從屬ハ獨立ノ控

訴ト看做サル

第四百五十八條 答辯書ニ新ナル事實若クハ舉證方法又ハ從屬スル
事ノ陳述ヲ掲クル時ハ其原本ヲ控訴人ニ送達スル事ヲ要ス控訴人
ハ七日ノ期間内ニ辯駁書ヲ差出ス事ヲ得

第四百五十九條 口頭辯論ノ期日ハ書面交換ノ終リタル後之ヲ定ム
第四百六十條 原告被告ノ雙方ヨリ控訴力起サレタル時ハ其兩控訴
ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ通例トス

第四百六十一條 副席判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ヨリ其判決ニ對
シ故障カ申立テラレ又相手方ヨリ控訴力起サレタル時ハ控訴ニ付
テノ辯論及ヒ裁判ハ故障完結スルマテ之ヲ中止ス

第四百六十二條 其他ノ訴訟手續ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ
設ケサル限りハ地方裁判所ノ第一審訴訟手續ノ成規ヲ適用ス

第四百六十二條 控訴裁判所ニ在テハ訴訟ハ其申立テラレタル不服

ニ因テ定マレル限界ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百六十四條 原告被告ハ其爲サレタル申立ヲ領會セシムル爲メ及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ正否ノ調査ノ爲メ必要ナル限りハ口頭辯論ノ際第一審ノ辯論ノ結果ヲ演述スル事ヲ要ス

演述ノ不正又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ完備ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシムル事ヲ要ス

第四百六十五條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アル時ト雖モ之ヲ許サス

第四百六十六條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ觀察セラレサルモノニ限り原告又ハ被告カ其過愆ニ非スシテ第一審ニ於テ之ヲ提出スル能ハサリシ事ヲ疎明スル場合ニ於テノミ主張セラル、事ヲ得

本事件ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ム事ヲ得ス然レ共裁判所ハ此ノ如キ抗辯ニ付キ分離シテ爲スヘキ辯論ヲ申立ニ因リ又ハ職

權ヲ以テ命スル事ヲ得

第四百六十七條 原告被告ハ第一審ニ於テ主張セラレサリシ攻撃防禦ノ方法、事實及ヒ證據方法ヲ提出スル事ヲ得

第四百六十八條 新ナル請求ハ相殺セラルヘキモノニシテ且原告又ハ被告カ其過愆ニ非スシテ之ヲ第一審ニ於テ提出スル能ハサリシ事ヲ疎明スル時ニ限り第二百十四條第二號及ヒ第三號ノ規定ヲ留保シテ起ス事ヲ得

相牽連セサル新ナル反對要求ハ相殺ノ爲メニモ亦控訴狀又ハ答辯書ニ於テノミ之ヲ主張スル事ヲ得

反訴ノ提起ハ之ヲ許サス

民事訴訟法草案

第二十回

日本
學
術
振
興
會

第四百六十九條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲サ、リシ陳述
又ハ拒ミタル陳述ハ控訴審ニ於テ之ヲ追完スル事ヲ得

第四百七十條 第一審ニ於テ爲サレタル裁判上ノ自認ハ控訴審ニ於
テモ亦其効力ヲ保存ス

第四百七十一條 控訴裁判所ハ控訴力許サル可キモノタルヤ否又控
訴カ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サレタルヤ否ヲ職權ヲ以テ審
査ス可シ若シ此要件ノ一カ缺クル時ハ判決ニ因リ控訴ヲ不適法ト
シテ棄却ス可シ

第四百七十二條 是認シ又ハ非認セラレタル請求ニ關スル争點ニシ
テ不服ノ申立ヲ受ケタルモノハ第一審ニ於テ此争點ニ付キ辯論及
ヒ裁判ヲ爲サ、リシ時ト雖モ總テ控訴ニ於ケル辯論及ヒ裁判ノ事
項タルモノトス

第四百七十三條 控訴裁判所ハ控訴ヲ理由アリトスル時ニ限り判決

本
三
二
一

ヲ變更シテ事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十四條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尙ホ辯論スル事ヲ必要トスル時ハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一 不服ノ申立ヲ受ケタル判決力關席判決ナル時

第二 關席判決ニ對スル故障又ハ非常故障力不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ不適法トシテ棄却セラレタル時

第三 不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタル時

第四 請求力其基本及ヒ數額ニ付キ爭ハレタル場合ニ於テ不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ先ツ其基本ニ付キ裁判ヲ爲シタル時

第五 爲替訴訟ニ於テ不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ敗訴ノ被告ニ特別ノ訴訟ヲ以テ訴追ヲ爲スノ抗辯權カ留保セラレタル時

第四百七十五條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ乖

戻シタル時ハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ訴訟手續ヲモ廢棄シテ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス事ヲ得

第四百七十六條 控訴カ理由ナシトセラレタル時ハ判決ノ認可ヲ言渡ス可シ

第四百七十七條 判決ヲ控訴人ノ損害ニ變更スル事ハ相手方カ控訴又ハ從屬控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタルモノニ限り之ヲ爲ス事ヲ得

第四百七十八條 控訴人カ口頭辯論ノ第一ノ期日ニ出頭セサル時ハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ關席判決ヲ以テ控訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第四百七十九條 出頭シタル控訴人カ口頭辯論ノ第一ノ期日ニ出頭セサル被控訴人ニ對シ關席判決アラン事ヲ申立ツル時ハ控訴人ノ事實上ノ口頭供述カ被控訴人ニ送達シタル書面ノ包有事項ト紙

解セス且被控訴人ノ爲メ第一審ノ記録ニ因テ覆ハル、攻撃、防禦ノ方法及ヒ舉證ノ結果ニシテ第一審裁判所ノ裁判ノ憑據ト爲リタルモノニ紙觸セサル限りハ其口頭供述ヲ自認シタルモノト看做サレ又控訴人ヨリ第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル爲メ申立テタル不適法ナラサル採證ハ既ニ爲サレ且其見込ム所ノ結果ヲ得タルモノト看做サル

第四百八十條 從屬控訴ノ場合ニ於テハ出頭セサル被控訴人ニ對シテハ第四百七十八條ノ規定ヲ準用シ又出頭セサル控訴人ニ對シテハ前條ノ規定ヲ準用ス

第四百八十一條 裁判所書記ハ控訴ノ完結シタル後記録ヲ第一審裁判所ニ送付シ又判決力發セラレタル時ハ其謄本ヲ之ニ添附ス可シ
第四百八十二條 名稱ノ爲メ許ス可カラサル上訴力起サレタリト雖モ情況ニ從ヒ原告又ハ被告力控訴ヲ見込ミタリトスル事ヲ得ヘク

且其控訴力許ス可キモノナル時ハ其控訴ヲ起シタルモノト看做ス
第四百八十三條 控訴提起ノ期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被告力天災若クハ其他避ク可カラサル事變ニ因リ其期間ヲ遵守スル事ヲ妨ケラレタル時ハ其原告又ハ被告ハ非常控訴ヲ爲スノ權利アリ
第四百八十四條 非常控訴ヲ起スノ期間ハ十四日トス其期間ハ障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マル

懈怠シタル控訴期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ滿了シタル後ハ最早非常控訴ヲ許サス

第四百八十五條 非常控訴ヲ起ス爲メノ書面ハ控訴狀ノ要件ニ相當スル書面ト共ニ之ヲ差出シ日左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一 非常控訴ノ理由タル事實ノ表明

第二 非常控訴ヲ起ス旨ノ陳述

第四百八十六條 非常控訴ノ申立人ハ相手方ノ陳述ニ拘ハラス非常

控訴ノ理由タル事實ヲ證明ス可シ

第四百八十七條 非常控訴ノ許否ニ付テノ訴訟手續ハ控訴ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合スヘシ但或ル争點ニ付キ辯論ヲ分離シテ爲ス事ヲ命ス可キ裁判所ノ權利ハ此力爲ノニ妨ケラレス

非常控訴ノ許否ニ付テノ裁判及ヒ裁判ニ對スル不服申立ニハ此ニ關シ控訴ニ付キ行ハル可キ成規ヲ適用ス然レ共非常控訴ヲ起シタル原告又ハ被告ハ故障ヲ申立ツルノ權利ナシ

第四百八十八條 非常控訴ノ許否ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノ費用ハ其相手方ノ理由ナキ異議ニ因テ生セサル限りハ申立人ノ負擔ニ歸ス

第二節 上告

第四百八十九條 上告ハ區裁判所及ヒ地方裁判所カ第二審裁判所トシテ發シタル判決又控訴院カ發シタル判決ニ對シ之ヲ爲ス事ヲ得
第四百九十條 上告ハ判決カ法律ノ違背ニ起因シ又ハ法律ニ違背シ

テ發セラレタリトノ事ノミヲ以テ證據ト爲ス事ヲ得

第四百九十一條 左ノ場合ニ於テハ法律ニ違背シタルモノトス

第一 法則カ其法律上ノ成規ニ基ケルト法律タルノ力アル慣習ニ基ケルトチ問ハス之ヲ適用ス可キニ適用セス又ハ之ヲ適用ス可カラサルニ適用シタル時

第二 訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ乖戾シタル時

第四百九十二條 上告ハ判事カ左ノ條件ニ付キ罷リタリトノ事ヲ以テ證據ト爲ス事ヲ得ス

第一 判事ノ意見ニ從ヒ適用スル事ヲ得ヘキ成規ノ適用

第二 事實ノ判定但其際法律ニ違背シタル時ハ此限ニ在ラス

第四百九十三條 上告期間ハ一个月トス其期間ハ判決書ノ送達ヲ以テ始マル

判決書ノ送達前ニ於ケル上告ノ提記ハ無効タリ

第四 第三號口及ヒハノ場合ニ於テハ必要ナル舉證方法ノ表示

第五 定マリタル申立

然レ共第四號ニ掲ケタル要件ノ欠缺ハ上告提起ノ効力ニ影響ヲ及
ホサス

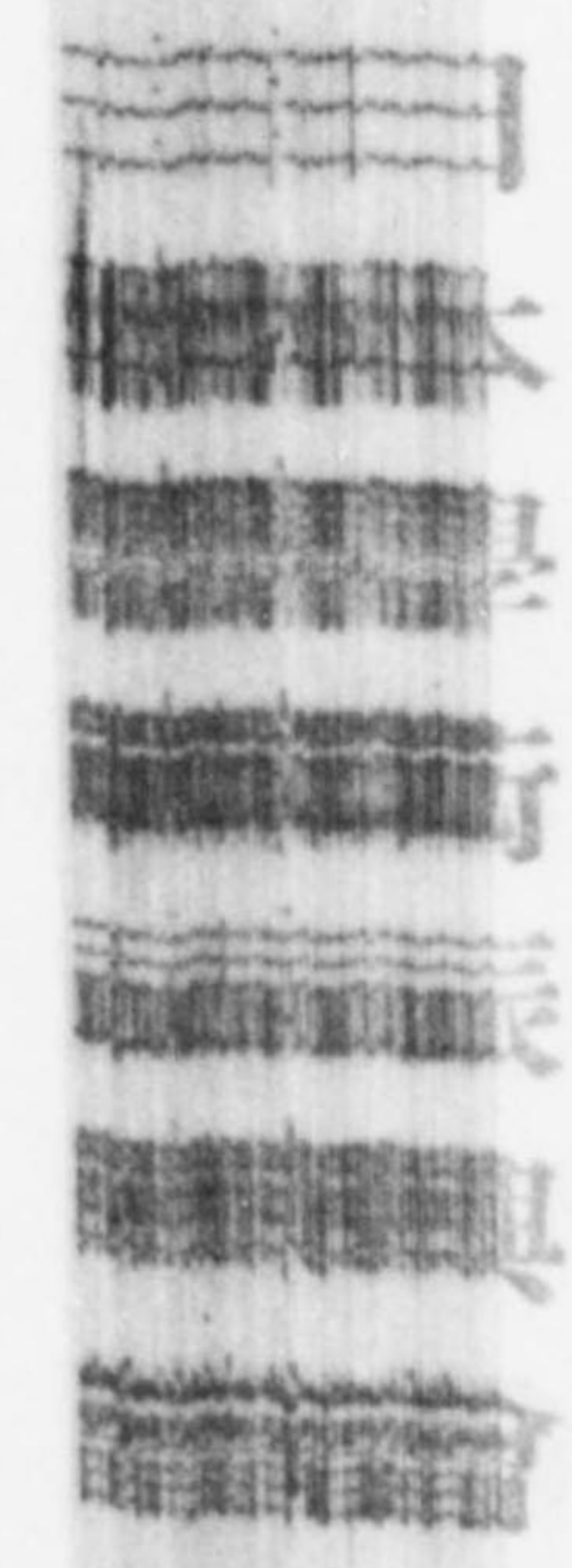
第四百九十七條 上告狀ニハ上告金ノ預リ證書又ハ受救權付與ノ證
明書ヲ添フ可シ若シ之ヲ添ヘサル時ハ上告ノ提起ヲ爲サ、ルモノ
ト看做ス

第四百九十八條 大審院ハ上告人ヲ呼出シタル上第五百三條ノ規定
ヲ準用シテ報告判事ノ演述ヲ以テ口頭ノ準備辯論ヲ始メ其辯論ニ
基キ上告ノ許否ニ付判決ヲ以テ裁判ス

上告カ受理セラル可キモノナル時ハ其受理スル事ヲ言渡ス可シ
上告カ許サレサルモノナル時又ハ其法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ
起サレサル時又ハ第四百九十條ノ規定ニ依ラサル時ハ之ヲ受理ス

可カラストシテ棄却ス可シ

上告人カ準備辯論ノ期日ニ出頭セサル時ハ上告ハ取下ケラレタル
モノト看做サル



民事訴訟法草案 第廿一回

日本學補遺會

第四百九十九條 上告カ受理セラレタル時ハ上告狀ノ副本ハ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キノ旨ヲ催告シテ之ヲ被上告人ニ送達ス

第五百條 答辯書ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作り且定マリタル申立ヲ掲クル事ヲ要ス

第五百一條 被上告人ハ上告ニ從屬スル事ヲ得從屬ハ答辯書ニ之ヲ陳述スル事ヲ要ス其從屬ハ若シ書面ニ第四百九十六條第三號ノ規定ニ依レル不服ヲ掲ケス又ハ申立ヲ掲ケサル時ハ法律上ノ効力ヲ有セス

其他被控訴人ノ控訴ニ從屬スル事ニ付テノ規定ヲ準用ス

第五百二條 答辯書ニ從屬ノ陳述ヲ掲ケタル時ハ其副本ヲ上告人ニ送達ス可シ上告人ハ七日ノ期間内ニ辯駁書ヲ差出ス事ヲ得

第五百三條 書面交換ノ終リタル後裁判長ハ報告判事ヲ任ス報告判

事ハ其記録ニ基キ裁判ノ爲メ要用トスル限りハ争訟ノ事實關係及
ヒ權利關係ノ表明書ヲ七日ノ期間内ニ作ル可シ但法律ニ係ル判定
ニ立入ル事ヲ得ス

其後ニ至リ口頭辯論ノ期日ヲ定ム

第五百四條 其他ノ訴訟手續ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケ
サル限りハ第二百四十一條ヲ除キ地方裁判所ノ第一審訴訟手續ノ
成規ヲ準用ス

第五百五條 口頭辯論ハ報告判事カ其表明書ニ依リ演說スル事ヲ以
テ始マル

原告被告ハ補充及ヒ更正ヲ爲シ之ニ次キ其申立ノ理由ヲ辯明スル
ノ權利ヲ有ス

第五百六條 大審院ハ上告書ニ於テ申立テラレ又ハ從屬ニ因リ答辯
書ニ於テ申立テラレタル不服ノミヲ調査ス

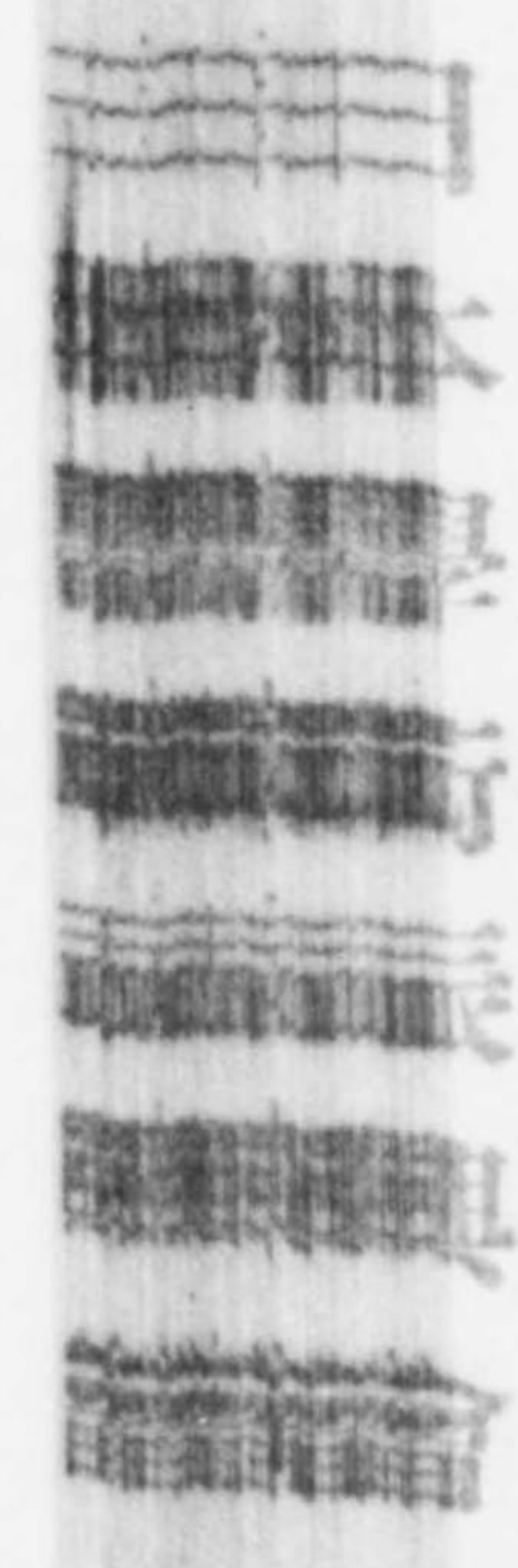
第五百七條 大審院ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ證據
トシタル事實ニ編束セラル此事實ノ外ハ第四百九十六條第三號口
及ヒハニ表示シタル事實ノミヲ斟酌スル事ヲ得

探證カ必要ト爲ル時ハ大審院ハ之ヲ命ス可シ其探證ノ完結ハ大審
院其意見ヲ以テ自ラ之ヲ爲シ又ハ之ヲ他ノ裁判所ニ委任スル事ヲ
得

第五百八條 上告カ理由アリトセラレ、時ハ不服ノ申立ヲ受ケタル
判決ヲ廢棄ス可シ

廢棄カ訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ乖戾スル爲メニ爲サ、ル
時ハ其乖戾スル限りハ其訴訟手續ヲモ亦廢棄ス可シ

第五百九條 判決廢棄ノ場合ニ於テハ次條ノ規定ヲ留保シテ更ニ辯
論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ前控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之
ヲ他ノ同等控訴裁判所ニ移送ス可シ



控訴裁判所ハ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス事ヲ要ス新ナル裁判ハ新ナル口頭辯論ニ基キ之ヲ爲ス原告被告ハ廢棄セラレタル判決ヲ發セシ前ノ口頭辯論ニ方リ提出スル事ヲ得ヘカリシ事項ヲ新ナル口頭辯論ニ際シ提出スルノ權利アリ

控訴裁判所ハ大審院ノ爲シタル法律ニ係ル判定ニシテ判決廢棄ノ基本トシタルモノヲ以テ標準ト認メ且之ヲ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲スノ義務アリ

第五百十條 大審院ハ左ノ場合ニ於テ判決ヲ廢棄シ事件其モノニ付キ裁判ス可シ

第一 判決ノ廢棄力確定セラレタル事件ニ法律ヲ適用スルニ方リ之ニ違背シタル爲メニ爲サレ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟シタル時

第二 判決ノ廢棄力訴訟ノ許ス可カラサル爲メ又ハ裁判所ノ管轄

違ナル爲メニ爲サレ時

第五百十一條 法律ニ違背シタル事カ裁判ノ理由ニ因テ顯ルハ時ト雖モ其他ノ理由ニ因リ裁判カ正當ナリト顯ハルハニ於テハ上告ヲ却下ス可シ

第五百十二條 上告カ理由ナク又ハ證明セラレサルト見ユル時ハ之ヲ却下ス可シ

第五百十三條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ成規ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 關席判決ニ對スル不服申立

第二 控訴ノ取下及ヒ控訴ヲ爲サ、ルノ契約

第三 原告被告ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル時ノ訴訟手續及ヒ控訴ト故離トテ同時ニ爲シタル時ノ訴訟手續

第四 控訴ヲ起シタル者ノ損害ト爲ル裁判ヲ許ス可カラサル事

第五 關席判決ヲ發スル事

第六 控訴ヲ起シタル事ノ届出及ヒ記録ノ差出并ニ遺付

第七 控訴ノ名稱不當ナル場合ニ於ケル訴訟手續

然レ供第六號ニ掲ケタル成規ニ付テハ左ノ特別ナル規定ヲ遵守ス可シ

若シ事件カ控訴裁判所ニ差戻サレ又ハ他ノ控訴裁判所ニ移送セラレタル時ハ記録ハ第一審裁判所ニ通知ヲ爲シテ直チニ之ヲ控訴裁判所ニ送致ス可シ大審院又ハ事件ノ移送ヲ受ケタル控訴裁判所カ事件其モノニ付キ裁判シタル時ハ前控訴裁判所ニ知ラシム爲メ判決ノ謄本ヲ之ニ送付ス

第五百十四條 上告提起ノ期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被告ハ天災若クハ其他ノ避ク可カラサル事變ニ因リ期間ヲ遵守スル事ヲ妨ケラレタル時ハ非常上告ヲ爲スノ權利アリ
非常上告ノ提起ニハ第四百八十四條以下ノ規定ヲ準用ス

第三章 抗告

第五百十五條 上訴ノ方法タル抗告ハ此法律ニ於テ特別ニ掲ケタル場合ノ外尙ホ左ノ諸件ニ對シ之ヲ爲ス事ヲ得

第一 訴訟手續ニ關スル申請ヲ却下スル裁判一決定及ヒ命令一

第二 強制執行手續ニ於テ發セラレタル裁判一決定及ヒ命令一

但右ノ裁判ヲ據ノ口頭辯論ヲ經スシテ發スル事ヲ得ル時ニ限ル

第五百十六條 抗告ニ付テハ直近上級裁判所之ヲ裁判ス

抗告裁判所ハ其主張セラレタル抗告ノ調査ノミヲ爲ス但職權ヲ以

テ觀察ス可キ訴訟手續ノ欠缺ニ關スル時ハ此限ニ在ラス

第五百十七條 抗告ハ不服ノ申立ヲ受クル裁判ヲ爲シタル裁判所ニ

抗告狀ヲ差出シテ之ヲ起ス

争訟カ區裁判所ニ繫屬シ若クハ審テ繫屬シタル時又ハ抗告力證人、鑑定人ヨリ起サレ若クハ證書若クハ檢證ノ目的ヲ提出スルノ義務

民事訴訟法ノ一七

アリト宣言セラレタル第三者ヨリ起サレタル時ハ口頭ヲ以テ抗告
ヲ爲ス事ヲ得

第五百十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ憑據トスル事
ヲ得

第五百十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所カ再度
ノ考案又ハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスル時ハ之ヲ聽
ク可シ然ラサレハ抗告ハ裁判所ノ陳辯ヲ付シテ三日ノ期間内ニ之
ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニハ訴訟記録ヲ添ヘテ之
ヲ送付ス可シ

第五百二十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ成規ヲ設ケタル場合ニ於
テノミ執行停止ノ効力ヲ有ス
然レ供不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ハ其執行ヲ抗
告ニ付テノ裁判アルマテ中止スル事ヲ命スル事ヲ得

第五百二十一條 急迫ナル場合ニ於テハ抗告ハ直チニ抗告裁判所ニ
之ヲ爲ス事ヲ得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲スノ前下級ノ裁判所ノ陳辯及ヒ記録ヲ要求
シ且假ノ命ヲ發スル事ヲ得

第五百二十二條 抗告裁判所ハ陳ノ口頭辯論ヲ經スシテ裁判スル
通例トス

裁判所ハ抗告人ノ利害關係ニ反對セル利害關係ヲ有スル者ニ書面
上ノ反對陳述ヲ爲サシム爲メ抗告ヲ通知シ且事實上ノ探知ヲ爲ス
事ヲ得

要求セラレタル反對陳述ハ抗告カ口頭ヲ以テ爲サレ得ヘキ場合ニ
於テハ又口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得

抗告裁判所ハ當事者ヲ口頭辯論ノ爲メ呼出ス事ヲ得

第五百二十三條 抗告裁判所ハ抗告カ許サル可キモノナルヤ否又法

律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ提出セラレタルヤ否ヲ職權ヲ以テ調査
ス可シ

若シ此要件ノ一カ缺クル時ハ抗告ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第五百二十四條 抗告カ適法ニシテ且理由アリト見ユル時ハ抗告裁

判所ハ其意見ヲ以テ自ラ必要ナル新命ヲ發シ又ハ不服ヲ申立テラ

レタル裁判ヲ爲シタル裁判所ニ之ヲ委任スル事ヲ得

抗告裁判所ノ裁判ノ言渡ハ抗告裁判所ニ於テ別段ニ定メサル限り

ハ下級ノ裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第五百二十五條 下級ノ裁判所ハ警屬ト爲リタル爭訟ニ於テハ抗告

裁判所ノ裁判ニ關東セラル

第五百二十六條 抗告裁判所ノ裁判ニ對スル抗告ハ此法律ニ於テ別

段ニ揚ケタル場合ニ非サレハ之ヲ許サス

第五百二十七條 受命判事若クハ受託判事又ハ裁判所書記ノ裁判ノ

變更カ求メラル、時、先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求メ其裁判ヲ以テ抗
告ノ目的トス

第五百二十八條 抗告ノ名稱不當ナル場合ニ於ケル訴訟手續ニ付テ

ハ第四百八十二條ノ規定ヲ準用ス

第五百二十九條 抗告提起ノ期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被告ハ天災

又ハ其他避ク可カラサル事變ニ因リ期間ヲ遵守スル事ヲ妨ケラレ

タル時ハ非常抗告ヲ爲スノ權利アリ

非常抗告ノ提起ハ第四百八十四條以下ノ規定ヲ準用ス非常抗告標

起ノ期間ハ七日トシ其障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マル

民事訴訟法草案

第廿二回

三權學備法興會

第六編 再審

第五百三十條 確定判決ヲ以テ終結シタル訴訟手續ハ取消ノ訴又ハ回復ノ訴ニ因リ之ヲ再施スル事ヲ得

第五百三十一條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ爲ス事ヲ得

第一 判決ヲ爲ス裁判所カ成規ニ依リ構成セラレサリシ時

第二 法律ニ因リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタル時
但除斥ノ理由カ忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ主張セラレタルモ其效ナカリシ時ハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタリシ時

第四 訴訟手續ニ於テ原告又ハ被告カ訴訟ヲ爲ス事ヲ明示又ハ默示ニテ許サレサル場合ニ於テ法律ノ成規ニ從ヒ代理セラレサリ

民事訴訟法
第六編
再審
第五百三十條
第五百三十一條

シ時

第五百三十二條 左ノ場合ニ於テハ回復ノ訴ニ因リ再審ヲ爲ス事ヲ得

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ背ク罪ヲ爭訟ニ關シ犯シタル判事力裁判ニ參與シタリシ時

第二 原告又ハ被告ノ法律上代人若クハ訴訟代人又ハ相手方若クハ其法律上代人若クハ訴訟代人カ原告又ハ被告ニ不利ナル裁判ヲ爲スニ至ラシメタル翻セラル可キ行爲ヲ爭訟ニ關シテ爲シタリシ時

第三 判決ノ證據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシ時

第四 證人、鑑定人又ハ證人トシテ訊問セラレタル相手方カ供述ニ因リ又通事カ判決ノ證據ト爲リタル通譯ニ因リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシ時

第五 判決ノ證據ト爲リタル刑事上ノ判決カ刑事訴訟法第四百三十九條以下ニ掲ケタル訴訟手續ニ於テ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄セラレタリシ時

第六 原告又ハ被告カ他ノ爭訟ニ於テ同一ノ爭訟物ニ付キ發セラレタル判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレタル判決ト牴觸スル時

第七 原告又ハ被告カ其利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キ他ノ證書ヲ發見シ又ハ之ヲ使用スル事ヲ得ル時

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ關セラル可キ行爲ノ爲メ確定判決カ爲サレタル時又ハ證據欠缺外ノ理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行カ爲サレ得サル時ニ限り再審ヲ爲ス事ヲ得

第五百三十三條 原告又ハ被告カ前訴訟手續ニ於テ判決ノ發セラルル前又ハ其確定ト爲ルノ前ニ不服ノ理由ヲ自己ノ過誤ニ非スシテ

本
法
第
五
百
三
十
三
條

主張スル事能ハサリシ時ニ限り再審ヲ爲ス事ヲ得

第五百三十四條 再審ノ訴ニ付テハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ發シタル裁判所ハ專屬管轄ヲ有ス

同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所ヨリ又一分ハ上級ノ裁判所ヨリ發セラレタル數箇ノ判決ニ對シ訴力起サル、時ハ其再審ハ上級ノ裁判所ノ專屬管轄タリ

區裁判所ノ督促手續ニ於テ發セラレタル支拂命令ニ對スル再審ノ訴ハ其支拂命令ヲ發シタル區裁判所ニ專屬ス然レ共其請求力區裁判所ノ管轄ニ屬セサル時ハ再審ノ訴ハ請求ニ付テノ爭訟ノ管轄裁判所ニ專屬ス

第五百三十五條 再審ノ訴ハ一个月ノ期間内ニ之ヲ起ス事ヲ要ス其期間ハ原告又ハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告又ハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタル時ハ期間

ハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シテ五午年ノ滿了シタル後ハ再審ノ訴ハ最早之ヲ許サス

前二項ノ規定ハ代理欠缺ノ爲ノ再審ノ訴ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又其訴訟能力ノ欠缺スル時ハ其法律上代人カ送達若クハ其他ノ方法ニ因リ判決ノ發セラレタル事ヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第五百三十六條 再審ノ訴ノ提起前原告ハ受數額ヲ付與セラレサル時ハ再審金十圓ヲ裁判所書記ニ預ク可シ

再審金ニ付テハ第四百九十四條ノ規定ヲ適用ス
第五百三十七條 再審ノ訴ノ提起ハ訴狀ヲ管轄裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

訴力區裁判所ニ屬スル時ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得

民事訴訟法
第五百三十七條
再審ノ訴ノ提起ハ訴狀ヲ管轄裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

再審ノ訴ノ名稱不當ナル場合ニ於ケル訴訟手續ニ付テハ第四百八十二條ノ規定ヲ準用ス

第五百三十八條 再審ノ訴ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作り且左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一 再審ノ訴ヲ受クル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ再審ヲ受ク可キ旨ノ陳述

第三 再審ノ理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明カナラシムル事實

ノ明示

第四 舉證方法ノ表示

第五 判決ノ廢棄ヲ如何ナル程度ニ於テ申立ツルヤ又本事件ニ於テ如何ナル他ノ裁判ヲ申立ツルヤノ陳述

然レ共第四號ニ掲ケタル要件ノ欠缺ハ其訴ノ提起ノ効力ニ影響ヲ及ホサス

第五百三十九條 再審ノ訴ニハ再審金ノ預リ證書又ハ受取附付與ノ證書ヲ添フ可シ若シ之ヲ添ヘサル時ハ其提起ヲ爲サ、ルモノト看做ス

第五百四十條 再審手續ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ其訴ニ付キ終結及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル成規ヲ適用ス

第五百四十一條 許ス可カラサル事ノ判然ナル再審ノ訴又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サレサル再審ノ訴ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ却下ス可シ

却下ノ命令ニ對シテハ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第五百四十二條 再審ノ原告ハ相手方ノ陳述アルニ拘ハラズ再審ノ理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明カニスル事實ヲ證明ス可シ

第五百四十三條 許ス可カラサル再審ノ訴又ハ法律上ノ方式及ヒ期



三
圖ニ於テ起サレサル再審ノ訴ハ廢權ヲ以テ判決ニ因リ不適用トシ
テ棄却ス可シ

第五百四十四條 再審ノ訴カ許ス可キモノナル時ハ本事件ニ付不服
申立ノ理由ノ存スル限りハ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ

裁判所ハ訴ノ許ス可キ事ニ付テモ又兩辯論ノ結果カ許ス限りハ本
事件ニ付テモ同時ニ判決ヲ以テ裁判スル事ヲ得

第五百四十五條 再審ノ原告ノ損害ニ判決ヲ變更スル事ハ相手方カ
再審ノ訴ヲ起シテ變更ノ申立ヲ爲シタル時ニ限り之ヲ爲ス事ヲ得

第五百四十六條 訴カ大審院ニ屬スル時ハ大審院ハ再審ノ理由及ヒ
其許否ニ付テノ辯論ノ完結カ係争確實ノ確定及ヒ其酌ニ費カル時
ト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第五百四十七條 再審ノ訴ニ付キ終セラレタル判決ハ訴ニ付キ裁判シタル裁
判所ノ判決ニ對シ普通ノ例規ニ從ヒ上訴ヲ許ス時ニ限り上訴ヲ以テ

之ニ對シ不服ヲ申立ツル事ヲ得又此裁判所ノ判決ニ對シテハ更ニ
再審ノ訴ヲモ起ス事ヲ得然レ共前ノ再審ノ訴カ第五百三十二條第
六號及ヒ第七號ノ理由ノ一ニ因テ起サレタル時ハ此理由ノ一ニ因
テ更ニ再審ノ訴ヲ起ス事ヲ得ス

第五百四十八條 再審ノ訴ヲ提起スル期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被
告ハ天災又ハ其他避ク可カラサル事變ニ因リ期間ヲ遵守スル事ヲ
妨ケラレタル時ニ限り非常再審ノ訴ヲ起スノ權利アリ

非常再審ノ訴ヲ提起スルニハ第四百八十四條以下ノ規定ヲ準用ス

第七編 特種ノ訴訟

第一章 口頭辯論ヲ以テ終結スル書面ノ訴訟手續

第五百四十九條 地方裁判所ニ於テ第一審ニテ繫屬ト爲リタル訴訟ニ付キ其事實上ノ關係又ハ證據材料ノ非常ニ廣大ナル爲メ若クハ特別ニ錯雜セル爲メ通常ノ訴訟手續ヲ以テ其爭訟ヲ解明シ盡ス事能ハサル時ハ此爭訟ニ付キ口頭辯論ノ期日ニ於テ申立ニ因リ又ハ職權ニ依リ口頭辯論ヲ以テ終結スル書面訴訟手續ノ開始ヲ命スル事ヲ得

第五百五十條 妨訴ノ抗辯ハ書面訴訟手續ヲ命スルニ付キ辯論ヲ爲スノ前ニ之ヲ完結ス可シ

第五百五十一條 書面訴訟手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ之ト同時ニ原告ヨリ訴ノ補充ノ爲メ書面ヲ差出ス可キ相當ノ期間ヲ定メ且判事一名ニ訴訟手續ノ指揮及ヒ報告ヲ委任ス可シ

第五百五十二條 書面訴訟手續ヲ命シ又ハ之ヲ拒ム決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス

第五百五十三條 訴ノ補充書ハ二十日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キノ催告ヲ附シテ之ヲ被告ニ送達ス原告力定マリタル期間内ニ訴ノ補充書ヲ差出サ、リシ場合ニ於テモ亦答辯書ヲ差出サシム

原告ハ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出シ被告ハ十四日ノ期間内ニ再答辯書ヲ差出ス事ヲ得

第五百五十四條 準備書面ニ付テノ普通規定ハ書面訴訟手續ニ於テ差出ス可キ書面ニモ亦之ヲ適用ス

第五百五十五條 抗辯、答辯及ヒ其他總テ提出ス可キ申述ハ同時ニ舉證方法ヲ表示シテ之カ爲ノ定マリタル書面ニ於テ之ヲ主張スル事ヲ要ス

第五百五十六條 原告被告ノ各方ハ其舉證方法トシテ用ヰントスル

所持ノ證書ヲ贖本ニテ其援用スル書面ニ添附ス可シ
相手方カ其原本ヲ閱覽セント求ムル時ハ其申立ニ因リ訴訟手續ノ指揮ヲ委任セラレタル判事ハ原本提出ノ期日ヲ定ム可シ其期日ニ原本ノ提出ヲ爲サ、ル原告又ハ被告ハ本審ニ於テ此舉證方法ヲ費フ

第五百五十七條 原告又ハ被告ノ主張シタル事實舉證方法及ヒ舉證抗辯ニ付テハ相手方ハ通常ノ訴訟手續ニ付テノ成規ニ從ヒ口頭辯論ニ於テ爲ス可キノ義務アル場合ト同一ノ方法ヲ以テ其書面中ニ陳述ヲ爲ス可シ若シ之ニ違フ時ハ其場合ト同一ノ失權ヲ受ク
爭ハレサル事實上ノ主張ハ自認セラレタルモノト看做サレ又眞正ナル事ノ爭ハレサル證書ハ認諾セラレタルモノト看做サル但原告又ハ被告ノ之ヲ爭ハントスル意思カ書面ノ其他ノ包有事項ニ因テ顯ハル、時ハ此限ニ在ラス

第五百五十八條 書面交換ノ終ハリタル時又ハ答辯書若クハ其他ノ書面ノ差出ヲ怠リタル時ハ報告判事ハ其記録ニ基キ裁判ノ爲ノ要用トスル限りハ争訟ノ事實關係及ヒ權利關係ノ表明書ヲ七日内ニ作ル可シ但法律ニ係ル判定ニ立入ル事ヲ得ス
其後ニ至リ口頭辯論ノ期日ヲ定ム

第五百五十九條 口頭ノ終結辯論ハ報告判事ノ表明書ニ依リ演述スル事ヲ以テ始マル

原告被告ハ補充及ヒ更正ヲ爲シ之ニ次キ其申立ノ理由ヲ辯明スルノ權利ヲ有ス

第五百六十條 口頭辯論ニ於ケル訴ノ變更ハ被告ノ承諾アル時ト雖モ之ヲ許サス

第五百六十一條 事實、證據方法及ヒ懸辯抗辯ニシテ書面ニ於テ主張セラレサリシモノハ原告又ハ被告カ其過類ニ非スシテ書面ニ於テ

主張スル能ハサリシ事ヲ説明スル時ニ限り之ヲ提出スル事ヲ得
事實上ノ主張及ヒ證據ニ付キ書面ニ於テ爲サ、リシ陳述ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スル事ヲ得ス

第五百六十二條 裁判所ハ原告被告ノ一方又ハ雙方カ口頭辯論ノ第一期若クハ其他ノ期日ニ出頭セサル時ニ於テモ亦記録ニ基キ裁判ス可シ

調席判決ハ之ヲ發スル事ヲ得ス
第五百六十三條 上級審ニ於テハ此章ノ規定ヲ適用セス

第二章 爲替訴訟

第五百六十四條 爲替條例ノ意義ニ於ケル振出シタル爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其住所ニ因ル裁判所ヲ有スル地ノ裁判所之ヲ管轄ス

數名ノ爲替義務者ハ支拂地ノ裁判所又ハ其一人カ住所ニ因ル裁判

籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ共同ニテ訴ラル、事ヲ得

第五百六十五條 訴狀ニハ爲替訴訟ニ付キ訴フル旨ノ陳述ヲ掲クル事ヲ要ス

爲替手形、支拂拒ミ證書及ヒ其他起サレタル請求ヲ證スル爲メ必
要ナル證書ハ原本ニテ訴狀ニ之ヲ添附スル事ヲ要ス

第五百六十六條 争訟ノ開始ニ對シ證據ノ存セサル場合ニ於テハ訴
ヲ起シタル時直チニ口頭答辯及ヒ其他ノ口頭辯論ノ期日ヲ定ム
準備書面ノ交換ハ之ヲ許サス

第五百六十七條 呼出期間ハ少ナク共二十四時間トス
口頭辯論ノ期日ノ變更ハ原告又ハ被告ノ一方カ期日ニ辯論スルニ
付キ難ク可カラサル障礙アル事ヲ申述シ日精明シタル時ニ限り之
ヲ許ス事ヲ得

第五百六十八條 爲替ノ訴ニ對シテハ爲替法ニ基ケル抗辯又ハ其然

ラサル場合ニ於テハ各時ノ原告ニ對シ直接ニ被告ニ屬スル抗辯ノ
ミヲ許ス

第五百六十九條 妨訴ノ抗辯ハ本事件ノ辯論ヲ拒ムノ權利ヲ被告ニ
與ヘス然レ共裁判所ハ申立ニ因リ又ハ證據ニ依リ此ノ如キ抗辯ニ
付キ分離シテ爲ス可キ辯論ヲ命スル事ヲ得

第五百七十條 反訴ノ提起ハ之ヲ許サス

第五百七十一條 舉證方法トシテハ即時提出セラル、證書、出願セ
シノタル證人又ハ證人トシテノ原告被告ノ訊問ノミ許サル
提出セラレタル證書ノ眞否ニ付テノ證ハ前項ニ明示シタル方法ヲ
以テノミ之ヲ舉クル事ヲ得

第五百七十二條 本來適法ナレ共適法ノ舉證方法ヲ以テ證據トセス
又ハ適法ノ舉證方法ヲ以テ證明セラレサル抗辯ニ付テハ裁判所ハ
被告カ敗訴ト爲リタル時其判決式文ニ於テ別ノ訴訟ヲ以テ其抗辯

ヲ追行スル事ヲ被告ニ留保ス可シ

若シ判決式文ニ於テ前項ノ留保ヲ定メサル時ハ被告ハ第三百八十九條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ申立ツルノ權利ヲ有ス

第五百七十三條 留保セラレタル抗辯ヲ追行セント欲スル時原告ノ被告ハ前ノ原告ニ對シ別ノ訴ヲ爲ス事ヲ要ス此訴ニ付テハ普通ノ例規ニ從ヒ管轄ヲ有スル裁判所ノ外爲替訴訟ニ關シ第一審ニテ判決ヲ爲シタル裁判所モ亦管轄ヲ有ス

判決式文ニ於テ被告ニ留保セラレサル抗辯ハ別ノ訴訟ニ於テ之ヲ主張スル事ヲ得ス

爲替訴訟ニ於テ主張セラレタル請求ノ理由ナカリシ事カ別ノ訴訟ニ於テ顯ハル、時ハ此請求ニ付キ發セラレタル判決ヲ廢棄シ且原告ノ爲替請求ヲ却下シ及ヒ此ニ因テ生シタル費用ヲ擔當セシメ又申立ニ因リ判決ニ基キ原告ニ支拂ヒタルモノ、擔當チ原告ニ負擔

ス可シ

第五百七十四條 判決ニ接着スル口頭辯論ノ終ニ至ルマテ原告ハ被告ノ承諾ヲ要セス且事件ノ繼續セル權利拘束ヲ害スル事無クシテ爲替訴訟ヲ止メ通常ノ訴訟手續ニ於テ爭訟力尙ホ辯論セラル可キノ申立ヲ爲ス事ヲ得

第五百七十五條 第五百六十五條以下ノ規定總論ニ於テモ亦之ヲ適用ス

第五百七十六條 爲替條例ノ意義ニ於ケル約束手形ノ訴ニハ此章ノ規定ヲ準用ス

第八編 強制執行

第一章 總則

第一節 強制執行ノ開始及ヒ續行

第五百七十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言アリタル終局判決ニ因テ之ヲ爲ス

第五百七十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ノ上訴タル控訴若クハ上告ノ提起ノ爲メ定メラレタル期間ノ滿了前ニハ確定ト爲ラス

判決ノ確定ト爲ル事ハ故障又ハ上訴タル控訴若クハ上告力適當ナル時間ニ提起セラル、ニ因テ妨ケラル、事無シ

第五百七十九條 原告又ハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムル時ハ第一審裁判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス

争訟カ尙ホ上級審ニ於テ懸隔中ナル時ハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス

證明書ハ判決書ノ正本ニ之ヲ追記ス

第五百八十條 證明書ノ付與カ判決ニ對シ控訴又ハ上告ノ起サレサ

ルニ懸カル場合ニ於テハ原告若クハ被告カ上訴ノ提起ニ付キ届出ヲ爲サスシテ上訴期間ヲ滿了セシメタル事ニ因リ又ハ上訴ヲ明ニ拋棄シタル事ニ因リ又ハ上訴狀ヲ成規ノ期間内ニ領收セル旨ヲ上級裁判所書記ノ證シタル事ニ因リ判決ノ確定ト爲リタル事ヲ判然ナラシムル時ハ其證明書ヲ付與スル事ヲ得

判決カ故障申立ヲ受クル時ハ證書ハ故障期間ノ滿了前ニ之ヲ付與スル事ヲ得ス

第五百八十一條 左ノ判決ニ付テハ其之ヲ發スルニ際シ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ宣言スノ判決

第二 片務契約ニ關スル證書ヲ以テ引受ケタル義務履行ノ責務ヲ宣言スノ判決但其證書カ内國ノ公證書若クハ爲替證券ナル時又ハ債務者其真正ナル事ヲ訴訟ニ於テ争ハサル時ニ限ル

第三 商ヒ取引ニ關スル商人間ノ争訟ニ付キ裁判スル判決

第四 占有ノ訴ニ付キ發セラレタル判決

第五 質借人チシテ質借ノ場所ヲ明渡サシノ又ハ質貸人チシテ質貸ノ場所ヲ引渡サシムル事ヲ言渡ス判決

第六 抑置又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五百八十二條 前條ニ掲ケタル判決ノ外ハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限り左ノ場合ニ於テ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣旨ヲ爲ス可シ

第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント提供スル時

第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ回復スルヲ得サル損害ヲ受ク可キ事ヲ證明スル時

第五百八十三條 假執行ハ訴訟費用ヲ包含セス又訴訟費用ニ付テハ之ヲ言渡ス事ヲ得ス

第五百八十四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルヲ得サル損害ヲ受ク可キ事ヲ債務者カ證明シタル時ハ其申立ニ因リ左ノ事件ヲ爲ス可シ

第一 第五百八十一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行セス可カラスト言渡ス事

第二 第五百八十二條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スル事

第五百八十五條 總テノ場合ニ於テハ申立ニ因リ裁判所ノ意見ヲ以テ假執行ヲ豫メ保證ヲ立ツル事ニ要カラシムル事ヲ得

債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツル事ヲ提供セサル時ハ債務者ノ申立ニ因リ保證ヲ立ツルニ因テ執行ヲ免カル、事ヲ之ニ許ス事ヲ要ス

第五百八十六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ

終結ノ前ニ之ヲ爲ス事ヲ要ス

第五百八十七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決式文ニ之ヲ掲ク可シ

第五百八十八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣旨ス可キ場合ニ於テ

假執行ニ付テノ裁判力爲サレサル時又ハ判決ノ假執行ヲ宣旨ス可

キ債權者ノ申立カ看過セラレタル時ハ第三百八十九條及ヒ第三百

九十條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲ス事ヲ得

第五百八十九條 假執行ニ付テノ裁判ニ對スル不服申立ハ本事件ノ

裁判ニ對シテ控訴ヲ起ス事ヲ以テノミ之ヲ爲ス事ヲ得

假執行ニ付キ控訴審ニ於テ發セラレタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申

立ツル事ヲ得ス

第五百九十條 第一審又ハ控訴審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言ナキモノ又ハ條件付ノ假執行ノ宣言アリタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ申立テラレサル部分ニ限り口頭辯論ノ經過中ニ爲シタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ決定ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第五百九十一條 本事件ノ前裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ變更スル判決ノ言渡アル時ハ假執行ハ其廢棄若クハ變更ノ爲サル、限度ニ於テ効力ヲ失フ
假執行ノ宣言アリタル本事件ノ判決力廢棄若クハ變更セラル、時ハ判決ニ基キ被告ノ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノ、雜償ヲ被告ノ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ

第五百九十二條 假執行ハ故障ノ申立又ハ控訴若クハ上告ノ提起ニ因テ妨ケラル、事無シ

然レ共申立テラレタル故雖若クハ上訴ニ付テノ裁判ノ爲ノニ主張
セラレタル情況カ法律上理由アリト見ヘ日事實上ノ點ニ付キ證明
セラレタル時ハ其裁判ヲ管轄スル裁判所ハ判決ノ發セラレ、マテ
保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ停止スル事
又ハ保證ヲ立テシメ強制執行ヲ繼續スル事又ハ既ニ實施セラレタ
ル執行行爲ヲ保證ヲ立テシメテ廢棄スル事ニ因リ命スルヲ得
其命ハ豫メ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ發シ又急迫ナル場合ニ於テハ
裁判長之ヲ發スル事ヲ得

第五百九十三條 前二條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ准用ス

第一 確定判決ニ對シ訴ニ因リ再審カ爲サル、場合

第二 非常故障、非常上訴又ハ非常再審ノ場合

第五百九十四條 此節ノ規定ニ從ヒ原告又ハ被告ニ保證ヲ立ツルノ
義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立ツル事ヲ許シタル場合ニ於テ其保

證ハ原告又ハ被告ノ住所ニ因レル裁判籍ヲ有スル區裁判所又ハ附
屬執行ノ爲サル可キ地若クハ其爲サレタル地ヲ管轄スル區裁判所
ニ於テ之ヲ立ツル事ヲ得

保證ヲ立テタル事ニ付テハ求ニ因リ證明書ヲ付與ス可シ

第五百九十五條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ本邦ノ裁判
所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナル事ヲ言渡シタル時ハ之ヲ爲ス
事ヲ得

執行判決ヲ發スルノ訴ニ付テハ債務者ノ住所ニ因レル管轄籍ヲ有
スル區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又此ノ如キ裁判所ナキ時
ハ第二十條ノ規定ニ從ヒ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ
管轄ス

外國ニ於ケル判決ニ包含セル裁判ノ正否ハ之ヲ調査スル事ヲ得ス
執行判決ヲ發スルノ訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一 外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタル事カ其裁判所ニ因リテ
證明セラレサル時

第二 本邦ノ法律ニ依リ禁セラレタル行爲ヲ執行セシム可キ時

第三 國際條約ニ因リ相互ナル可キ事カ保セラレタル時

其執行ハ此法律ノ成規ニ從フ

第五百九十六條 強制執行ハ執行ノ命令ヲ付シタル判決書イ正本一
執行力アル正本一ニ基キ之ヲ爲ス

執行命令ヲ得ントスル申立ハ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
然レ共争訟カ上級裁判所ノ繫屬中ニ在ル時ハ其裁判所ニ之ヲ爲ス
可シ

其申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得

第五百九十七條 執行命令ハ判決書ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス
其文左ノ如シ

前記ノ正本ハ某一原告又ハ被告ノ表示一ニ對スル強制執行ノ命
令ヲ以テ某一被告又ハ原告ノ表示一ニ之ヲ付與ス
執行命令ノ檢認ハ裁判長之ヲ爲ス

第五百九十八條 判決書ノ執行力アル正本ハ其判決カ確定ト爲リタ
ル時又ハ假執行ノ宣言アリタル時ニ限り之ヲ付與ス

判決書渡ノ際不在ナリシ原告又ハ被告ニ對シテハ判決書ノ送達ア
リタル後始メテ執行力アル正本ヲ付與スル事ヲ得

判決ノ執行力其包有事項ニ從ヒ保證ヲ立ル事ニ非サル條件ニ整ル
場合ニ於テハ債權者カ信スルニ足ル可キ證明書ヲ以テ其條件ノ履
行ヲ證スル時ニ限り執行力アル正本ヲ付與スル事ヲ許ス

第五百九十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者ノ爲メ
ニノミ及ヒ判決ニ表示シタル債務者ニ對シテノミ之ヲ付與スル事
ヲ得但左ノ場合ハ之ヲ例外トス

第一 判決ニ表示シタル債權者又ハ債務者カ死亡シ相續人之ニ代ハリタル時ハ執行力アル正本ハ相續人ノ爲メ又ハ相續人ニ對シ之ヲ付與スル事ヲ得

第二 判決ニ表示シタル債權者又ハ債務者ニシテ戸主タリシ者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒ他ノ戸主之ニ代ハリタル時ハ執行力アル正本ハ新戸主ノ爲メ又ハ新戸主ニ對シテ之ヲ付與スル事ヲ得

右ニ掲ケタル變更ハ其申立人信スルニ足ル可キ證明書ニ因リテ之ヲ證ス可シ

第六百條 執行力アル正本ハ債務者ニ之ヲ交付ス其交付前裁判所書記ハ判決書ノ原本ニ如何ナル原告又ハ被告ノ爲メ如何ナル被告又ハ原告ニ對シ且如何ナル時日ニ其正本ヲ交付スルヤヲ記ス可シ

第六百一條 債權者カ執行力アル正本數通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタ

ル正本ヲ返還セスシテ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムル時ハ之ヲ付與スルノ前相手方ヲ口頭若クハ書面ヲ以テ審訊スル事ヲ得

執行力アル正本數通ヲ付與シ又ハ更ニ之ヲ付與シタル時ハ相手方ヲ審訊セサル場合ニ限り其旨ヲ相手方ニ知ラシム可シ

第六百二條 執行力アル正本ノ効力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラスシテ總テ本邦ノ裁判區域内ニ及フモノトス

第六百三條 強制執行ハ債權者ノ責任ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百四條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ定メ有ラサル限りハ執達吏之ヲ實施ス

執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リ行爲ヲ爲シ且債權者及ヒ其他ノ利害關係人ニ對シ職務上ノ義務違背ヨリ生シタル損害ノ責ニ任ス

第六百五條 此法律ニ於テ裁判所ニ任セタル執行行爲ノ命又ハ其行

爲ノ補助ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス
法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各條ノ場合ニ於テハ執行手
續ノ爲サル可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ
執行裁判所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判一命令一ハ豫メ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ發スル
事ヲ得

第六百六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲ス
ニ因リ完全ナル辨償ヲ得ル能ハサル時ハ數通ノ執行力アル正本ニ
基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲スノ權利アリ

第六百七條 債權者カ執行行爲ノ爲サル可キ地ヲ管轄スル區裁判所
ノ所在地ニ住セサル時ハ同地ニ住スル第三者ノ方ニ於テ住所ヲ選
定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ又債務者ニハ強制執行ニ着手スル

ノ前執達吏ヨリ其旨ヲ通知セシム可シ

強制執行ハ前項ニ掲ケタル手續ヲ爲シタル後ニ非サレハ之ヲ始ム
ル事ヲ得ス

第六百八條 請求ノ主張力或ル曆日ノ到來ニ暨ル時ハ其曆日ノ滿了
シタル後ニ非サレハ強制執行ヲ始ムル事ヲ得ス

若シ執行力債權者ヨリ保證ヲ立ツル事ニ暨ル時ハ債權者カ保證ヲ
立テタル事ニ關スル裁判上ノ證明書ヲ提出シタル後ニ非サレハ其
執行ヲ始ムル事ヲ得ス

第六百九條 若シ執行力アル正本ノ付與ニ對シ債務者ヨリ又其付與
ノ拒絶ニ對シ債權者ヨリ抗告ヲ起シタル時ハ不服ノ申立ヲ受ケタ
ル裁判ヲ爲セル裁判所及ヒ抗告裁判所ハ裁判ヲ爲スノ前假處分ヲ
爲ス事ヲ得殊ニ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執
行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ繼續スルヲ命ス

ル事ヲ得

第六百十條 判決ニ因テ確定セラレタル請求其モノニ關スル債務者ノ異議ハ其判決ヲ發シタル後義務ノ理由タル事實消滅シタル時ニ限り之ヲ許ス其異議ハ強制執行ヲ爲ス債權者ニ對シ異議ノ訴ヲ以テ強制執行停止ノ爲メ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張ス可シ然レ共債務者カ數箇ノ異議ヲ有スル時ハ同時ニ之ヲ主張スル事ヲ要ス

第六百十一條 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ有シ又ハ其他目的物ノ讓渡若クハ債權者ニ對スル其還付ヲ妨クルノ權利ヲ有スル時ハ其強制執行ニ對スル異議ヲ訴ニ因リ債權者ニ對シテ主張シ又債務者ニ於テ其異議ヲ理由アリト認メサル場合ニ於テハ債權者ト債務者トニ對シテ之ヲ主張ス可シ其訴カ債權者ト債務者トニ對シテ起サル、時ハ此兩人ヲ以テ第六

十六條ノ意義ニ於ケル共同爭訟人ト看做ス可シ其訴ニ付テハ執行裁判所管轄ヲ有ス然レ共爭訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサル時ハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之カ管轄ヲ有ス

第六百十二條 強制執行ノ繼續ハ前二條ノ場合ニ於テ異議ノ訴ノ提起ニ因テ妨ケラレス

然レ共異議ノ爲メ主張セラレタル情況カ法律上理由アリト見ヘ且事實上ノ點ニ付キ疎明セラレタル時ハ異議ノ訴ニ付テノ裁判ヲ管轄スル裁判所ハ判決ノ發セラル、マテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ停止スル事又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ繼續スル事又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ廢棄スル事ヲ申立ニ因リ命スル事ヲ得前條ノ場合ニ於テハ執行處分ノ廢棄ハ第三者ヨリ保證ヲ立テサルモ之ヲ許ス可シ

其命ハ雖ノ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ發シ又急迫ナル場合ニ於テハ
裁判長之ヲ發スル事ヲ得

急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行用スル事ヲ得此
場合ニ於テハ同時ニ其裁判所ハ異議ノ訴ヲ管轄スル裁判所ノ裁判
書ヲ提出セシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可シ其期間ヲ徒過シタル
時ハ債權者ノ申立ニ因リ強制執行ヲ繼續ス

第六百十三條 受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前
條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ廢棄シ變更シ若クハ
認可スル事ヲ得

其判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ
其不照申立ニ付テハ第五百八十九條ノ規定ヲ適用ス

第六百十四條 強制執行ハ左ノ書類ノ提出セラレタル場合ニ於テ之
ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス可シ

第一 執行セラル可キ判決若クハ其假執行力廢棄セラル、事又ハ
強制執行力許サレストシテ宣言セラレ若クハ其停止力命セラレ
タル事ノ顯ハル、執行力アル裁判書ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時停止力命セラレタル事ノ顯ハル、
裁判書ノ正本

第三 執行ヲ免カル、爲メ保證ヲ立テタル事ノ顯ハル、裁判上ノ
證明書

第四 債權者カ執行セラル可キ判決ノ發セラレタル後擔償ヲ受ケ
又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル事ノ顯ハル、證書

第五 執行セラル可キ判決ノ發セラレタル後債權者ニ擔償ヲ爲ス
爲メ必要ナル金額カ債權者ニ拂渡ス爲メ郵便局又ハ銀行ニ拂込
マレタル事ノ顯ハル、郵便爲替券若クハ爲替證券

第六百十五條 假執行ノ宣言アリタル判決又ハ確定ト爲リタル判決

ハ前條第一號ノ意義ニ於テ執行命令ヲ要セスシテ直チニ執行セラ
ル可シ

其確定ト爲リタル事ハ大審院ノ判決ニ限り證明ナクシテ之ヲ認ム
ル事ヲ得但大審院ノ判決タリ其副席判決ナル時ハ其確定ト爲リタ
ルヲ證明スル事ヲ要ス

抗告審ニ於テ發セラレタル裁判ト假執行ノ宣言アリタル判決ヲ本
事件ニ付キ又ハ假執行ニ付キ廢棄シ若クハ變更スル判決トハ確定
ト爲ル前ニ於テモ強制執行ノ停止ヲ爲サシムルニ足ルモノトス

第六百十六條 若シ第六百十四條第一號及ヒ第二號ノ場合ニ於テ提
出セラレタル證書ニ因リ強制執行ノ停止又ハ執行處分ノ廢棄力豫
ノ保證ヲ立ツル事ニ懸ル事ノ懸ハル、時ハ第六百八條第二項ノ規
定ヲ準用ス

第六百十七條 第六百十四條第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ

爲サレタル執行處分ヲモ廢棄ス可シ第二號ノ場合ニ於テハ其裁判
ニ因リ従前ノ執行行爲ノ廢棄ヲ命セサル時ニ限り既ニ爲サレタル
執行處分ヲ一時存立セシム第四號及ヒ第五號ノ場合ニ於テモ亦第
二號ノ場合ニ同シト雖モ債權者ノ求アル時ハ強制執行ヲ始メ又ハ
之ヲ繼續ス可シ

債權者カ義務履行ノ猶豫ノミヲ承諾シタル時ハ不動産又ハ船舶ノ
強制執行ニ關スル規定ヲ留保シテ猶豫期間ノ滿了後直チニ強制執
行ヲ始メ又ハ之ヲ繼續ス可シ

第六百十八條 強制執行ノ停止ノ義務ヲ生セシム可キ事實ヲ知リテ
適當ナル時間ニ必要ノ處分ヲ爲ス事ヲ怠タリシ債權者ハ此ニ因リ
テ生スル損害ノ責ニ任ス

第六百十九條 債務者強制執行ノ始マリタル後ニ死亡スル時ハ強制
執行ハ遺産ニ對シ直チニ之ヲ繼續ス可シ

債務者ノ立會ヲ要スル執行行爲カ實施セラル可キ時ハ相續人未タ其地位ヲ占ムルニ至ラス又ハ相續人ノ所在不分明ナル場合ニ限り債權者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ遺產又ハ相續人ノ爲ノ臨時代人ヲ任ス可シ

第六百二十條 戶主タリシ債務者カ強制執行ノ始マリタル後ニ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタル時ハ其變更ノ生スル時ニ債務者ノ所持セシ財産ニ付キ前條第一項ノ規定ヲ準用ス

第六百二十一條 強制執行ノ費用ハ其必要ナリシ部分ニ限り債務者ノ負擔ニ歸ス
其費用ハ強制執行ノ基本タル判決カ本事件ニ付キ廢棄セラレタル時ハ債務者之ヲ辨償ス可シ

第六百二十二條 執行行爲ノ際債務者ニ爲ス可キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在不分明ナル時又ハ外國ニ在ル時ハ之ヲ必要トセス

第六百二十三條 執行又ハ其停止ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスル時ハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ求ム可シ

第六百二十四條 強制執行カ本邦裁判所ニ司法共助ヲ爲ス官廳ノ在ル外國ニ於テ爲サル可キ時ハ債權者ノ申立ニ因リ第一審裁判所ハ必要ナル囑託書ヲ發スル爲メ成規ノ方法ヲ以テ司法大臣ニ上申ス可シ

強制執行カ本邦人ニ付キ裁判權ヲ行用スル外國駐劄ノ本邦領事ニ因リテ爲サレ得ヘキ時モ亦同シ

第六百二十五條 強制執行ハ左ノ諸件ニ因リテモ亦之ヲ爲ス事ヲ得

第一 費用確定ノ命令及ヒ其他ノ裁判但其裁判ハ抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツル事ヲ得又ハ總テ如何ナル不服ヲモ申立テラレサルモノニ限ル

第二 督促手續ニ於テ發セラレタル支拂命令但異議期間ノ滿了シ

タル後ニ限ル

第三 第二百五十一條ノ場合ニ於ケル認諾

第四 訴ノ提起後争訟ノ全部又ハ一分ヲ解止スル爲メ受訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル和解

第五 和解手續ニ於テ爲シタル和解

第六 本邦ノ公證人カ其權限内ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作りタル證書但其證書ハ定マリタル金額ノ支拂又ハ他ノ代補物若クハ有價證券ノ定マリタル數量ノ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ作ラレタルモノニ限ル

「前記ノ債務名義ニ因レル強制執行ニハ第五百九十六條以下ノ規定ヲ準用ス」

第六百二十六條 執行力アル正本ヲ陸軍若クハ海軍ニ屬スル軍人軍屬又ハ海陸軍文官ニ付與スル時ハ其旨ヲ債務者ノ直近上座ノ軍事

官廳ニ通知ス可シ

第六百二十七條 國、府縣、區郡、町村及ヒ社寺ニ對シテハ裁判上ノ強制執行ヲ爲ス事ヲ得ス

前項ノ無形人ニ對シ執行セラル可キ債務名義ノ執行ニ關スル時ハ債權者ノ申立ニ因リ第一審ノ受訴裁判所ハ必要ノ處分ノ爲メ管轄行政官廳ニ囑託ス可シ其官廳力之ニ應セス又ハ適式ニ之ニ應セサル時ハ成規ノ方法ヲ以テ司法大臣ニ上申ス可シ

第二節 執達吏ノ執行官吏タル職務

第六百二十八條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スル時ニ限り執行行爲ヲ爲スノ權利ヲ有ス

第六百二十九條 強制執行ノ委任カ執行力アル正本ノ交付ヲ以テ債權者又ハ其訴訟代人ヨリ爲サレタル時ハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサル時ト雖モ支拂及ヒ其他ノ給付ヲ受取り受取りタルモノニ付

キ有効ニ受取ノ證書ヲ作り日債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタル時ハ債務者ニ執行力アル正本ヲ交付スルノ權利アリ

第六百三十條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルノミニ因リテ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行爲ヲ實施スルノ權利アルモノトス執達吏ハ其正本ヲ携帶シ當事者ノ求ニ因リ資格ヲ證スル爲メ之ヲ提示ス可シ

第六百三十一條 執達吏ハ執行命令書ニ表示セラレタル債權者ノ爲メノミニ及ヒ債務者ニ對シテノミニ執行ノ委任ヲ受クル事ヲ得委任者ニ於テ自身カ表示セラレタル債權者ニ代ハリタル事又ハ第三者カ表示セラレタル債務者ニ代ハリタル事ヲ主張スル時ハ執達吏ハ第六百十九條及ヒ第六百二十條ノ規定ヲ留保シテ執行ヲ止メ且其委任者ヲシテ必要ノ申立ヲ裁判所ニ爲サシム可シ

第六百三十二條 債權者ハ自費ヲ以テ強制執行ニ立會フノ權利アリ

第六百三十三條 日出前、日没後ノ時間及ヒ日曜并ニ普通ノ祝祭日ニハ執行裁判所ノ明許アルニ非サレハ執行行爲ヲ爲ス事ヲ得ス其許可ヲ與フル命令書ハ強制執行ノ際之ヲ提示ス可シ

第六百三十四條 執達吏ハ執行ニ着手スルノ前債務者自身ニ出會ヒタル時ハ債務者ニ對シ任意ノ給付ヲ催告ス可シ若シ債務者ニ出會ハサレ共其家族ニ出會フタル時ハ之ニ對シ催告ヲ爲ス可シ又債務者及ヒ其家族ニ出會ハス又ハ任意ノ給付ノ爲メノ催告力無効ナリシ時ハ執行ヲ始メ且債權者ニ完全ノ辨濟ヲ爲シ及ヒ其生シタル費用ヲ償フニ至ルマテ執行ヲ繼續ス可シ

民事訴訟法草案

第二十四回

目次
第一章
第二章
第三章
第四章
第五章
第六章
第七章
第八章
第九章
第十章

三
本
學
律
法
學
會

第六百三十五條 執達吏ハ債務者又ハ第三者ノ異議若クハ抵抗ニ因リテ執行ヲ止ムル事ヲ得ス

何人ニテモ或ル理由ニ依リ異議ヲ述ヘント欲スル者アル時ハ其旨ヲ調書ニ記載シタル上之ヲシテ裁判所ニ異議ヲ述ヘシム可シ

第六百三十六條 執行ハ成ル可ク速ニ其目的ヲ達スル様之ヲ實施ス可シト雖モ其實施ニ因リ債務者ニ無用ノ損失ヲ被ムラシメサル事ヲ要ス

執達吏ハ冗費ヲ生スル事無ク且執行ノ目的ヲ害セサル場合ニ限り適宜ニ債權者及ヒ債務者ノ希望ヲ顧ミル可シ

第六百三十七條 執達吏ハ執行ノ目的ニ付キ必要トスル場合ニ於テハ債務者ノ住居及ヒ各貯藏所ヲ搜索シ閉鎖シタル家屋并ニ房室ノ戸及ヒ貯藏所ヲ成ル可ク注意シテ之ヲ開キ又ハ適當ノ職工ヲシテ之ヲ開カシムルノ權利アリ

抵拒アル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用キ且警察上ノ援助ヲ求ムル事ヲ得然レ共執達吏ハ此場合ニ於テ郡長、區長、戶長又ハ隣佑二人ヲ證人トシテ立會ハシムル事ヲ要ス

若シ債務者ノ住居ニ於テ執行行爲ヲ爲スニ際シ債務者ニモ又其家族若クハ其雇人ニモ出會ハサル時ニモ亦同シ

第六百三十八條 執達吏ハ強制執行ノ際債務者ノ有形動産ニ對スル強制執行ヲ以テ執行ノ費用ヲモ亦取立ツ可シ

執達吏ノ手数料并ニ立替金、執行力アル正本付與ノ費用及ヒ其他強制執行ヲ爲ス爲ノ債權者ニ生シタル必要ナル裁判外ノ費用ハ前項ノ費用ニ屬ス

右ニ付テハ金錢ノ債權ノ爲メニスル強制執行ニ係ルト其他ノ強制執行ニ係ルトヲ區別セス

第六百三十九條 執達吏ハ債務者其義務ヲ完全ニ盡シタル時ハ執行

力アル正本ヲ之ニ交付ス可シ又其義務ノ一分ヲ盡シタル時ハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且其領收證書ヲ債務者ニ付與ス可シ債務者力後ニ債權者ニ對シ領收證書ヲ求ムルノ權利ハ前項ノ規定ニ因テ妨ケラル、事無シ

第六百四十條 執達吏ハ執行行爲ニ付キ直チニ證書ヲ作ル可シ

其證書ニハ左ノ諸件ヲ掲ケル事ヲ要ス

第一 爭訟標目

第二 執行力アル正本ノ表示

第三 執行行爲ノ目的物及ヒ其重要ナル情況ノ略記

第四 執行ニ與カリタル各人ノ表示

第五 右各人ノ署名捺印

第六 證書ヲ當事者ニ讀聞セ又ハ閱覽ノ爲メ之ニ揭示シタル事及ヒ其承諾ノ後署名捺印アリタル事ノ明示

第五號及ヒ第六號ニ掲ケタル要件ヲ具備スル事能ハサル時ハ其理由ヲ明示ス可シ

債權者及ヒ債務者ニハ其求ニ因リ證書ノ謄本ヲ付與ス

第六百四十一條 執行行爲ニ關スル催告及ヒ其他ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ爲シ且調書ニ之ヲ記載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス事能ハサル時ハ第六百六十四條及ヒ第六百六十八條乃至第七十三條ノ規定ヲ準用シテ署名捺印ニ因リ認證セラレタル調書ノ謄本ヲ送達シ且特別ノ送達證書ヲ作ラサル限りハ調書ノ原本ニ其送達アリタル事ヲ記載ス可シ

若シ送達力強制執行ノ地ニ於テモ又執行裁判所ノ管轄内ニ於テモ爲サル、事能ハサル時ハ第七百四十條第二項ノ規定ヲ留保シテ催告又ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ謄本ヲ送致シ且郵便ニ之ヲ交付シタル事ヲ調書ノ原本ニ記載ス可シ

第六百四十二條 執達吏ハ此法律ニ成規ナキ場合ト雖モ債權者ノ利益ヲ保護スル爲ノ要用トスル時ハ委任ノ完結スル前出席セサル債權者ニ對シ各執行行爲ノ結果ヲ通知ス可シ

第六百四十四條ノ場合ノ一ニ於テ債權者ノ指圖ナクシテ強制執行ノ停止又ハ制限ヲ爲シタル時ハ執達吏ハ其事ニ付キ調書ヲ作り債權者ニ之ヲ通知ス可シ其調書ニハ執行ノ停止又ハ制限ヲ爲スノ憑據タル提出書類ヲ詳細ニ表示シ且其爲サレタル命ヲ明示ス可シ

第六百四十三條 債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ノ裁判所書記ノ補助ヲ求ムル事ヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第六百四十四條 執達吏ハ其受ケタル強制執行ノ委任ニ付キ帳簿ヲ作り各強制執行ニ付テハ總テ同一ノ事件ニ關スル書類ヲ互ニ連接

セシムル様記録ヲ編製シ其帳簿及ヒ記録ヲ整理シ及ヒ保存スルノ
責ニ任ス

執行手續ニ參カリタル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ面前ニ於テ記
録ノ閱覽ヲ許シ且騰寫料ヲ拂ハシメテ各書類ノ原本ヲ付與スル事
ヲ要ス

第六百四十五條 執達吏カ此法律ノ規定又ハ裁判上ノ命ニ依リ取立
テタル金錢若クハ有價證券ヲ裁判所ニ預ク可キ時又ハ執行行爲ニ
付キ報告ヲ爲ス可キ時ハ署名捺印ニ因リ認證セラレタル調書ノ贖
本及ヒ執行力アル正本ヲ其納付書若クハ報告書ニ添附ス可シ
執達吏カ執行力アル正本尙ホ要用トスル時ハ裁判所ハ其正本ヲ之
ニ還付ス可シ但必要ナル場合ニ於テハ其認證セラレタル贖本ヲ留
置ク可シ

第六百四十六條 債權者、債務者及ヒ執行手續ニ參カリタル各第三

者ハ執達吏ノ爲シタル手續ニ關シ執行裁判所ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得
執行裁判所ハ抗告ヲ理由アリトスル時ハ其稟届ノ爲メ必要ナル命
ヲ發ス

執達吏カ執行委任ヲ引受クル事ヲ拒ミ若クハ執行行爲ヲ委任ニ從
ヒテ實施スル事ヲ拒ミタル時又ハ執達吏ノ計算セル手数料ニ付キ
異議アル時ハ執行裁判所ハ其裁判ヲ爲スノ權アリ

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 有形動産ニ對スル強制執行

第六百四十七條 有形動産ニ對スル強制執行ハ差押ヲ以テ之ヲ爲ス
第六百四十八條 有形動産ノ差押ハ執達吏力之ヲ占有スルヲ以テ成
ル

第六百四十九條 公債證書、株券及ヒ其他ノ有價證券ハ此規定ノ意

發ニ於ケル有形動産ニ屬ス

爲替證券及ヒ之ニ類スル證券并ニ所有權若クハ債權ノ權利名義ヲ成ス證書ハ有形動産ト同一ニ之ヲ差押フル事ヲ得ス然レ共執達吏ハ時ニ債權者ノ求アル時又ハ他ニ充分ナル價格ヲ有スル動産物存セサル時ハ債權者ノ爲メ他ノ執行方法ノ用ニ供スルノ目的ニテ右ノ證券又ハ證書ヲ假ニ差押フ可シ但此目的ノ爲メ其證券又ハ證書ヲ債務者ヨリ取上ケ之ヲ封緘シ表書捺印シテ郡長、區長若クハ戶長ニ預ク可シ

第六百五十條 差押ハ執行力アル正本ニ明示シタル債權ノ元金、利息并ニ費用ヲ債權者ニ辨償スル爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲メ必要ナルモノ、外ニ及フ事ヲ得ス

若シ現存スル物ノ一分ヲ以テ右ノ目的ヲ達スルニ足ル時ハ債務者ハ現金及ヒ有價證券ヲ除キ差押ヲ免カル可キ物ヲ選定スル事ヲ得

全ク價格ナキ物ノミニ存在スル時又ハ存在スル物ヲ變價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ルノ見込ナキ時ハ執達吏ハ其差押ヲ止ム可シ

第六百五十一條 債權者ハ差押ヘタル物ニ付キ契約ヲ以テ得取シタル債權ニ均シキ質權ヲ差押ニ因テ得取ス

債權者ハ此質權ニ依リ他ノ債權者ニ先チテ差押物ヲ以テ辨償ヲ受クル事ヲ得債權者ハ差押ノ後債務者ノ財産ニ付キ破産力開始セラレ、時ハ破産財團ニ對シテモ亦此權利ヲ有ス然レ共其質權ハ差押ノ前差押物ニ付キ契約ニ因リ質權ヲ有効ニ得取シタル債權者又ハ民法ニ從ヒ特別ノ優先權及ヒ破産ニ於テ別除權ヲ有スル債權者ノ權利ニ後ル、モノトス

前ノ差押ニ因リ得取シタル質權ハ後ノ差押ニ因リ得取シタル質權ニ先タツモノトス

第六百五十二條 第三者カ差押ヲ受ク可キ物ニ付キ質權又ハ優先權
ヲ有スルモ其物ヲ占有セサル時ハ差押ヲ妨クル事ヲ得ス然レ共第
六百十一條ノ規定ニ從ヒ訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先ノ權ヲ請求
スルノ權利ハ此カ爲ノ妨ケラレス此場合ニ於テ裁判所ハ請求ノ爲
ノ主張セラレタル情狀カ法律上理由アリト見ヘ且事實上ノ點ニ付
キ説明セラレタル時ハ賣得金ヲ裁判所書記ニ預クル事ヲ命ス可シ
但此事ニ付テハ第六百十二條及ヒ第六百十三條ノ規定ヲ準用ス
第六百五十三條 執達吏ハ差押ヘタル現金ニシテ直チニ債權者ニ支
拂フ事ヲ得サルモノ及ヒ差押ヘタル高價物ヲ封緘シ表裏捺印シテ
郡長、區長又ハ戶長ニ預ク可シ
有價證券ヲ差押ヘタル時ハ現狀ノ届書ト共ニ裁判所書記ニ之ヲ差
出ス可シ

第六百五十四條

執達吏ハ其他ノ差押ヘタル物ヲ債權者ヨリ取上ケ

郡長、區長、戶長又ハ差押ノ地ニ住スル確實ニシテ支拂力アル
各箇人ニ保管セシムルヲ通例トス此場合ニ於テ執達吏ハ保管人ヲ
シテ其保管ニ付セラレタル物ヲ確收シタル事ヲ證セシメ又保管人
ノ求ニ因リ之ニ其物ノ目錄ヲ交付ス可シ
保管人カ報酬ヲ請求スル時ハ協議ノ上豫メ相當ニ金額ヲ確定ス可
シ

執達吏ハ差押ヘタル物ノ確ナル收置及ヒ保管ニ付キ其實ニ任ス
第六百五十五條 執達吏ハ左ノ場合ニ限り差押ヘタル物ヲ債務者ヨ
リ取上クルノ例規ニ從ハサル事ヲ得

第一 債權者ノ承諾アル時

第二 物ノ運搬力其性質ニ因リ著シキ困難又ハ不相應ノ費用ヲ生
セシム可キ時

此場合ニ於テハ差押ノ効力ハ封印又ハ其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ判

然ナラシムル事ニ因テ生ス

此目的ノ爲ノ各箇ノ物ニ封印ス可キヤ又ハ差押物ヲ容レタル及ヒ
外包、容器、場所等ニノミニ封印ス可キヤハ執達吏其物ノ性質及
ヒ其他ノ情狀ニ因リ之ヲ定ム可シ

差押物ノ性質ニ因リ封印スル事能ハサル時ハ執達吏ハ差押物ノ傍
側ニ於テ各人ノ目ニ觸レ易キ箇所ニ自己ノ署名捺印シタル廣告書
ヲ貼付シ其差押ヘラレタル事ヲ判然ナラシム可シ又各箇ノ場合ニ
於テ必要トスル時ハ看守人ヲ置ク可シ若シ其看守人カ報酬ヲ請求
スル時ハ前條第二項ノ規定ヲ適用ス

第六百五十六條 債務者ノ占有ニ係ル物ニ付キ第三者ヨリ自己ノ所
有物ナル事若クハ自己ノ暫取シタル物ナル事ヲ申立テ又ハ債務者
ヨリ自己ノ所有物ニ非ラス若クハ第三者ニ暫ニ入レタル物ナル事
ヲ表示シタル場合ニ於テ尙ホ請求ニ應ス可キ物他ニ存在スル時又

ハ債權者ノ承諾アリタル時ハ執達吏ハ其債務者ノ占有ニ係ル物ノ
差押ヲ爲ス事ヲ得ス

若シ差押ノ際立會ハサリシ第三者ニ所有權若クハ暫權ノ屬スル物
ヲ差押ヘタル時ハ債務者ハ其差押ヲ遲滯ナク第三者ニ通知スルノ
義務アリ債務者其通知ヲ怠リタル時ハ第三者ニ對シ此力爲ノ生ス
ル損害ノ責ニ任ス

第六百五十七條 債權者カ債務者ノ所有ニシテ第三者ノ占有ニ係リ
タリトスル物ノ差押ヲ求ムル時ハ執達吏ハ先ツ第三者ニ對シ直チ
ニ引渡ヲ爲シ得ヘキヤヲ問合ハス可シ第三者カ引渡ヲ承諾シタル
場合ニ於テハ債務者ノ保管ニ係ル物ヲ差押フルト同一ノ方法ヲ以
テ其差押ヲ爲ス可シ若シ第三者其物ヲ占有セスト申立テ又ハ其引
渡ヲ拒ム時ハ執達吏ハ第三者ニ對シ之ヲ債務者ニ引渡スヲ禁シ又
債務者ニ對シ之ヲ處分スルヲ禁シ及ヒ第六百四十九條第二項ノ規

定ニ從ヒ右ノ物ノ引渡請求ニ關スル債務者所持ノ證書ヲ假ニ差押フル事ノミチ爲ス可シ

右第三者ニ對スル禁止ハ債權者カ一个月内ニ其物ノ引渡ニ關スル債務者ノ請求權ヲ裁判上差押ヘタル時ニ限り假差押ノ効力ヲ有ス第六百五十八條 債權者カ自己ノ占有ニ係ル債務者ノ物ヲ差押ノ目的物トシテ表示シタル時ハ執達吏ハ直チニ通常ノ方法ヲ以テ其差押ヲ爲ス可シ

第六百五十九條 左ノ物ハ之ヲ差押フル事ヲ得ス

第一 衣服、寢具、家具及ヒ廚具但此物カ債務者及ヒ其家族ノ爲ノ

缺ク可カラサル時ニ限ル

第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル二週日間分食料及ヒ薪炭

第三 印

第四 神佛佛像及ヒ其他債務者ノ家内ニ於テ禮拜ノ用ニ供シタル

物

第五 乘譜

第六 債務者ノ身分ニ因リ缺ク可カラサル衣服

第七 勳章及ヒ名譽ノ證據

第八 職務ヲ行フ爲メ文武ノ官吏ニ必要ナル物

第九 技術、學藝又ハ業務ニ従事スル者ノ所持スル物ニシテ其乘ヲ行フ爲メ缺ク可カラサルモノ但其物ハ債務者ノ選擇ニ從ヒ價額五十圓マテヲ限リトス

第十 債務者又ハ其家族ノ者ノ未タ公ニセサル發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其家族ノ者ノ未タ公ニセサル稿本

第十一 特別ノ法律ヲ以テ差押ヲ禁シタル物然レ共強制執行力前項ニ掲ケタル物ノ賣渡若クハ修繕ニ因リテ生シタル請求ノ爲メ爲サレタル時ハ其物ハ第一號、第二號及ヒ第七號ニ掲ケタルモ

ノヲ除キ之ヲ差押フル事ヲ得

第六百六十條 執達吏ハ債務者ニ賜スル執レノ物ニ付キ前條ノ規定ニ從ヒ差押ヲ得ス可キヤヲ誠實ニ定ム可シ

差押ヲ爲ス事ヲ得ヘキヤ否ヤノ疑ハシキ物ハ請求ニ應ス可キ物他ニ存在スル時又ハ債權者ノ承諾アリタル時ハ之ヲ差押フ可カラス又差押ヲ爲ス事ヲ得可キヤ否ニ付テノ爭訟ハ債權者若クハ債務者ノ抗告ニ因リ執行裁判所之ヲ裁判ス

第六百六十一條 差押力債權者ノ請求ヲ完済スルニ足ラス又ハ第六百五十條第三項ニ掲ケタル理由ニ因リテ差押ヲ止メタル時ハ執達吏ハ差押ヲ免カレタル物ヲ調査若クハ其附録ニ記載シ戸長若クハ區長ヲ立會ハシメ且戸長若クハ區長力債務者ノ其地ニ於テ尙ホ他ノ財産ヲ所持スル事ヲ知ラサル場合ニ於テハ之ヲシテ其旨ヲ調査若クハ附録ニ記載セシム可シ若シ戸長又ハ區長力良心ニ戻リテ其

記載ヲ爲シタル時ハ債權者ニ對シ此ニ因リテ生スル損害ノ費ニ任ス

第六百六十二條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フル事ヲ得然レ供其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一个月内ニ非サレハ之ヲ爲ス事ヲ得ス

第六百六十三條 債務者カ兵營又ハ軍艦ニ在ル時ハ執達吏ハ管轄指令官應ニ就キ差押ノ處分ヲ請求シ其引渡サレタル差押物ニ付キ通常ノ方法ヲ以テ差押ヲ爲ス可シ

第六百六十四條 差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスル時ハ執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲ス可シ若シ此力爲メ差押ヲ要スル時ハ債權者ヲシテ之ヲ豫納セシメ又債權者數名ノ關係スル時ハ其要求額ノ割合ニ從ヒ其各債權者ヨリ之ヲ豫納セシム可シ

要求シタル豫納金ヲ給付セサル爲メ差押物ヲ尙ホ保存スル事能ハ

ス且未タ其競賣ヲ爲ス事ヲ得サル時ハ執達吏ハ差押物ヲ債務者ニ返還シ其旨ヲ差押調書ニ追記ス可シ

第六百六十五條 差押ノ効力ハ當然差押物ノ天然ノ產物ニモ及ヒ其產物ハ之ヲ生シタル差押物ト共ニ競賣ス

第六百六十六條 債務者及ヒ債權者雙方ノ合意アリタル時ハ執達吏ハ差押物ノ競賣ニ至ルマテ其使用ヲ債務者ニ任カセ又ハ債權者若クハ第三者ニ許ス事ヲ得

若シ其合意成ラサル時ハ債權者又ハ債務者ハ執行裁判所ニ其認可ヲ求ムルノ權利アリ但其使用ニ因リテ得タル金額ハ競賣代金ニ之ヲ加フ

第六百六十七條 差押ニ付キ作ル可キ調書ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ撰ク可シ

第一 各箇ノ差押物ノ見積價額ヲ明示シタル其差押物ノ詳細ナル

記載

第二 執達吏カ其物ヲ占有シタル事及ヒ如何ニ其收置ニ付キ處分ヲ爲シタルヤノ明示

第三 債務者ニ差押ヲ通知シタル事又ハ後日如何ニ之ヲ知ラシム可キヤノ明示

若シ執達吏カ直チニ競賣期日ヲ定ノタル時ハ調書ニ其期日ノ時并ニ地及ヒ告^公ヲ爲シタル方法若クハ之ヲ爲ス可キ方法ヲモ亦明示ス可シ

第六百六十八條 執達吏ハ差押ヲ實施シタル移債權者又ハ裁判所ノ特別委任ヲ要セスシテ下ノ數條ノ規定ニ從ヒ公ケノ競賣ノ方法ヲ以テ其差押物ヲ賣却ス可シ然レ供執行裁判所ハ當事者ノ申立ニ因リ差押物ノ他變價方法ヲ認可スル事ヲ得

第六百六十九條 競賣ハ差押ノ有リタルト同一ノ市町村ニ於テ之ヲ

爲ス但債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ於テ之ヲ爲ス事ヲ合意シ又ハ
裁判所ヨリ其地ヲ指定シタル時ハ此限ニ在ラス

債權者ノ利益ノ爲メ他ノ場所ニ於テ競賣ヲ爲ス事必要ナル時ハ執
達吏ハ直チニ其旨ヲ債權者ニ通知シテ他ノ競賣ノ地ヲ定ムルニ付
キ債務者ト合意スル事ヲ得セシノ若シ其合意成ラサル時ハ債權者
ヲシテ其地ノ指定ヲ裁判所ニ申立ツル事ヲ得セシム可シ

第六百七十條 競賣ノ期日ハ差押ノ際執達吏直チニ之ヲ定ム可シ若
シ當事者カ期日ヲ後日ニ至リ定ムヘキ事ヲ一致シ又ハ各箇ノ場合
ニ於テ其即時ノ指定ヲ爲ス事能ハサル時若クハ之ヲ即時ニ指定ス
ル事ノ不適當ト見ユル時ニ限り期日ノ指定ヲ^{一時}止ム可シ
差押ノ際直チニ指定セサリシ期日ハ債權者及ヒ債務者ニ之ヲ知ラ
シム可シ

差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ少ナク共七日ノ時間ヲ存セサル可

カラス但當事者カ競賣ヲ更ニ早ク爲サン事ヲ合意シタル時又ハ差
押物ヲ永ク貯藏スルニ付テノ不相應ノ費用若クハ其物ノ價額著シ
ク減少スルノ危害ヲ避ケン爲メ競賣ヲ更ニ早ク爲ス事必要ナル時
ハ此限ニ在ラス

其他期間ハ競賣ス可キ差押物ノ性質及ヒ價額ニ相當スル方法ヲ以
テ期日ヲ公告シ得ヘキ様之ヲ定ム可シ然レ供期日ヲ差押後三十日
以上延引セシムルニハ特別ノ理由ノ存スル事ヲ要ス

第六百七十一條 競賣ヲ爲スニハ豫メ公告スル事ヲ要シ其公告ハ左
ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スモノトス

第一 裁判所揭示板ニ於ケル揭示

第二 競賣物ノ存在スル地ニ於ケル揭示

高價ナル物ニ付テハ亦新聞紙ニ掲載スルニ因テ公告ヲ爲ス可シ
公告シタル期日ヲ取消シタル時ハ遲滞ナク其旨ヲ公告ス可シ

第六百七十二條 公告ニハ左ノ諸件ヲ包含スル事ヲ要ス

第一 競賣ス可キ物ノ種類ノ概略ノ表示但高價物アル時ハ特別ニ之ヲ表示ス可シ

第二 競賣ノ地及ヒ日時ノ明示

第六百七十三條 競賣セラル可キ物ノ中ニ金銀物又ハ高價物アル時

ハ執達吏ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其價額ヲ評定セシムル事ヲ要ス

第六百七十四條 土地ヨリ離レサル前ニ差押ヘタル果實ノ競賣ハ其

成熟シタル後始メテ之ヲ爲ス事ヲ許ス其競賣ヲ爲スニ付テハ買主

ニ收穫ヲ任カス事ヲ得然レ共執達吏ハ競賣ノ爲メ其收穫ヲ爲サシ

ムルノ權利アリ

第六百七十五條 執達吏ハ期日ノ始マル前ニ差押物ノ悉皆存在スル

ヤ及ヒ其爲シタル封印ノ完全ナルヤヲ調査ス可シ若シ差押物紛失

シ又ハ封印、外包、容器若クハ貯藏所ノ破損シタル時ハ執達吏ハ

其原因ヲ穿鑿シ罰セラル可キ行爲ノ嫌疑アル時ハ其行爲ヲ管轄スル官廳ニ之ヲ申告ス可シ

第六百七十六條 争訟ノ繫屬セシ裁判所及ヒ執行裁判所ノ判事、并

ニ官吏又ハ執達吏若クハ其補助人ハ差押物ヲ自身ニテモ又他人ニ

由リテモ又他人ノ爲メニモ得取スル事ヲ得ス

第六百七十七條 競賣ニ付テハ左ノ賣却條件ヲ要ス

第一 最高價競買ノ爲メノ競落ハ其價額ヲ三回呼上ケタル後之ヲ

爲ス然レ共其價額カ物ノ實價ニ著シク不相當ナル時ハ競落ヲ許

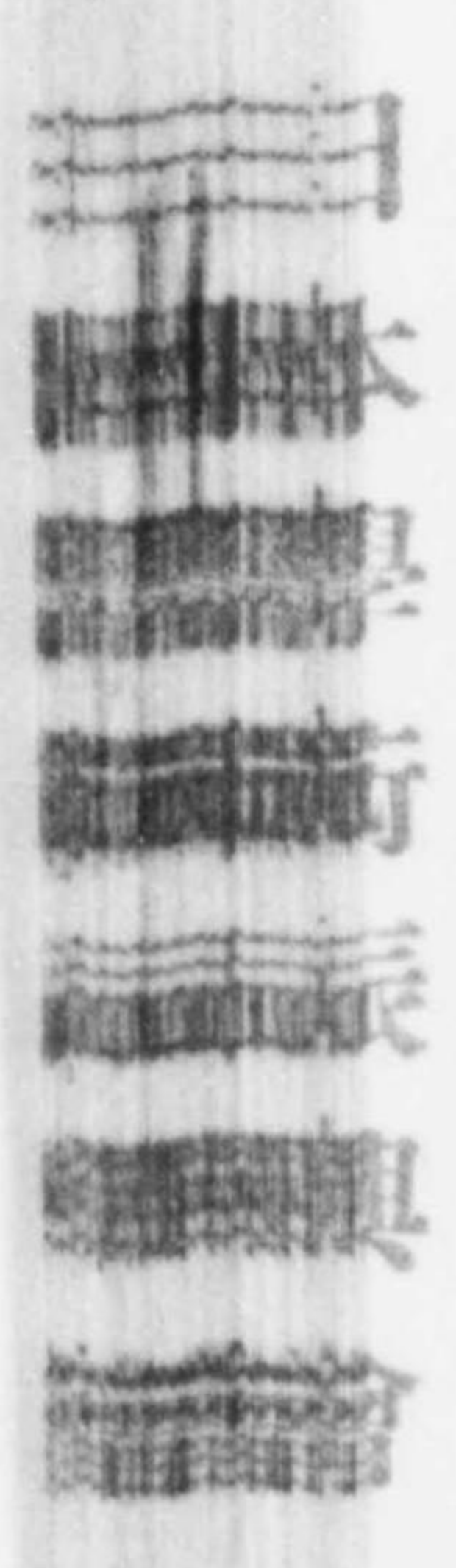
サ、ル事ヲ競買最高價ヲ三回呼上ケタル後物ノ競落ヲ得サリシ

最高價競買人ハ其競買價額ニ拘束セラル、事無シ

第二 競落シタル物ノ引渡ハ代金拂濟ニ對シテノミ之ヲ爲ス

第三 最高價競買人カ競賣期日ノ終ル前ニ代金支拂ニ對シ競落サ

レタル物ノ引渡ヲ求メサル時ハ直チニ其物ヲ再ヒ競賣ス可シ此



場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競買ニ加ハル事ヲ得ス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ抵キ時ハ不足ヲ擔任シ其高キ時ハ不足ヲ請求スル事ヲ得ス

第四 金銀物又ハ高價物ニ付テハ評定價額ニ依テ競買ヲ爲サシノ其價額以下ノ競買價額ハ之ヲ受ケス

此條件ノ變更ハ當事者間ニ合意アル時又ハ裁判所ノ命アル時ニ非サレハ之ヲ許サス

第六百七十八條 競賣ハ執達吏賣却條件ヲ高懸ニ即懸シテ廣告シタル後之ヲ始ム

競賣物ハ各箇ニ之ヲ競買セシメ又其事ノ不適當ナラサル時ハ一擧ニ之ヲ競買セシメ且同時ニ之ヲ示ス事ヲ要ス

第六百七十九條 競賣ハ其各箇ノ物ニ關シ競買代價ヲ數回呼上ケテ之ヲ爲ス

競買最高價ヲ三回呼上ケタル後競落ヲ爲シ又ハ其競落ヲ許サ、ル事ヲ告知ス可シ



民事訴訟法草案

第二十五回

日本學律振興會

第六百八十條 執達吏ハ競賣ヲ不當ニ進ムルヲ避ケン爲メ時々賣得金ヲ計算シ其金額カ債權者ニ辨濟シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ル時ハ直チニ競賣ヲ止ム可シ

第六百八十一條 競賣ニ關シテ作ル可キ調書ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一 競賣ニ因テ償フ可キ債權ノ額但強制執行ノ費用ヲ包含ス

第二 競賣期日ヲ公告シタル方法ノ明示但此明示ヲ差押調書ニ掲ケサリシ時ニ限ル

第三 賣却條件但第六百七十七條ノ例規ト異ナリテ定メラレタルモノニ限ル

第四 競賣物ノ員數、各箇ノ物ニ付テノ買主并ニ最高價競買價額ノ明示及ヒ代金ノ支拂ニ關スル附記

競買人中最高價競買人ノミ調書ニ署名捺印ヲ爲ス可シ若シ最高價

競買人カ期日ノ終結前ニ出席シタル時ハ其旨ヲ調書ニ明示ス可シ
 第六百八十二條 第六百七十七條第一號ノ規定ニ基キ最高價競買人
 ニ物ヲ競落スル事ヲ許サ、リシ時又ハ物ニ付キ競買ヲ爲ス者ナキ
 時又ハ金銀物若クハ高價物ニ付キ評定價額ニ當ル價ヲ流フル者ナ
 キ時ハ執達吏ハ其旨ヲ調書ニ記載シ且其物ヲ貯藏シタル事及ヒ其
 貯藏ノ方法ヲモ明示ス可シ此場合ニ於テハ執達吏ハ裁判所ニ報告
 ヲ爲シテ其後ノ指圖ヲ待ツ可シ

裁判所ハ債權者カ評定價額ニテ其物ヲ引受ケント欲スル時ハ其物
 ヲ之ニ引渡ス事又ハ新ニ拍賣期日ヲ定メ其物ノ價額ニ相應スルト
 否トニ拘ハラズ最高價競買人ニ其物ヲ競落ス事ヲ命スル事ヲ得
 第六百八十三條 執達吏ハ取立テタル金錢一任意ニ支拂ヒタルモノ、
 差押ニ因リ取立テタルモノ及ヒ拍賣ニ因リ得タルモノニ付キ其
 取立テタル事及ヒ其取立ノ方法ヲ調書ニ記載シタル後調書ノ附録

ニ於テ債權者ニ屬ス可キ金額、強制執行ノ費用及ヒ殘額アレハ其
 殘額ヲ證明ス可キ計算ヲ揭ク可シ其計算シタル金額ハ債收ノ權利
 アル者ニ運滯ナク之ヲ拂渡スモノトス

債權者現在セサル時ハ郵便爲替券又ハ爲替證券ヲ以テ之ニ拂渡ス
 可シ但其金額ヨリ第一ニ差引ク可キ送付費用カ執達吏自身ニテ其
 金額ヲ送致スル手数料ヨリ算キ時ニ限ル

若シ殘額ヲ交付セラル可キ債務者又ハ報酬ヲ請求スル保管人若ク
 ハ看守人カ現在セサル時ハ執達吏ハ其者ニ屬ス可キ金額ヲ拂渡サ
 シムル爲メ郡長、區長若クハ戸長ニ渡ス可シ

執達吏ハ其爲シタル拂渡ニ付キ受取證書ヲ取置ク可シ受取證書、
 爲替證券及ヒ郵便爲替券ハ調書ニ之ヲ添フルモノトス

第六百八十四條 若シ執達吏カ委任セラレタル差押ヲ實施スルノ前
 他ノ債權者ヨリ同一ノ債務者ニ對スル差押ヲ委任セラレタル時ハ



總テノ委任ヲ同時ニ付與セラレタルモノトシテ取扱ヒ且數名ノ債權者ノ爲ノ差押ヲ同時ニ實施ス可シ委任ヲ付與セラレタル順序ノ如何ヲ問ハス其委任ノ付與ノミニテハ債權者ノ爲ノニ優先權ヲ生セシメス

數名ノ債權者ノ爲ノ同時ニ爲シタル差押ニ付テハ只一箇ノ調書ヲ作ル可シ此調書ニハ通常ノ要件ノ外數名ノ債權者ノ爲ノ差押ヲ同時ニ爲シタル事ヲ揭クル事ヲ要ス

競賣ハ總テノ關係ハ債權者ノ爲ノ同時ニ之ヲ爲ス

取立テタル金額ヨリ強制執行ノ費用ヲ差引キタル後其殘額力諸債權者ノ債權金額^ニ滿タサル時ハ各債權額ノ割合ニ應シテ債權者ニ辨償ス可シ前條第一項ノ規定ニ從ヒ作ル可キ計算書ニハ各債權者ニ屬ス可キ金額ヲ明記スル事ヲ要ス

執達吏ハ關係債權者ノ一名ヨリ七日ノ期間内ニ異議ノ申立アラサ

ル時ニ限り其計算書ニ依リ拂渡ヲ爲ス可シ若シ其期間内ニ異議カ申立テラレタル時ハ執達吏ハ強制執行ノ費用ノミヲ支拂ヒ殘額ヲ其現状ニ關スル屆書ト共ニ執行裁判所ノ書記ニ渡ス可シ其裁判所ハ分配手續ヲ爲スモノトス

第六百八十五條

若シ執達吏カ差押ニ着手スルニ際シ債務者ノ方ニ

於テ既に差押カ實施セラレタル事ヲ知ル時ハ先ツ前差押ノ及ハサル物ニ着目ス可シ此場合ニ於テ差押ニ係ラサル物全ク存在セス又ハ充分ニ存在セサル時ハ其委任者ノ名ヲ以テ前差押ニ加ハル事ノ陳述ヲ差押調書ニ揭クル事ヲ要ス此陳述ハ差押ノ効力ヲ有スルモノニシテ其陳述ノ時日ハ調書ニ詳細ニ之ヲ表示ス可シ

前ノ差押カ他ノ執達吏ニ由リ爲サレタル時ハ署名捺印ヲ以テ證據セラレタル調書ノ謄本ヲ執行力アル正本及ヒ其他債權者ノ委任ヲ揭クル書類ヲ其後ノ手續ヲ爲サシムル爲メ遅ク共三日内ニ其執達

日本銀行振興會

更ニ交付シ其旨ヲ債權者ニ通知ス可シ此場合ニ於テハ法律ニ依リ
第二以後ノ債權者ノ委任モ第一ノ差押ヲ爲シタル執達吏ニ移ルモ
ノトス

第一ノ差押ヲ爲シタル執達吏ニ由レル説賣ハ總テ關係債權者ノ爲
ノ同時ニ之ヲ爲ス

取立テタル金額ヨリ強制執行ノ費用ヲ差引キタル後其殘額力該債
權者ノ債權金額ニ滿タサル時ハ差押ノ順序ニ從ヒ各債權者ニ拂償
ス可シ計算書ノ作成及ヒ計算シタル金額ノ拂渡又ハ裁判上ノ寄託
ニ付テハ前條第四項及ヒ第五項ノ規定ヲ適用ス

第六百八十六條 債權者ハ差押ヘタル有價證券ヲ現金ノ支拂ニ代ヘ
テ引渡サレン事ヲ執行裁判所ニ求ムル事ヲ得其引渡ヲ爲スニハ受
取證書ヲ取り且債務者ニ交付ス可キ殘額アラハ其殘額ヲ支拂ヒ右
有價證券ヲ裁判所ヨリ債權者ニ交付ス可シ

債權者カ現金支拂ニ代ヘテ證券引渡ヲ申立ツル時ハ債權者債務者
ノ雙方ヲ期日ニ呼出シ引渡ヲ爲スノ憑據タル可キ代價ニ付キ之ヲ
審訊ス可シ若シ引受價額ニ付キ一致スル事能ハサル時ハ債權者ノ
求ニ因リ證券ノ相場ヲ以テ又相場ナキ時ハ其額面價額ヲ以テ引渡
ノ憑據ト爲ス可シ

第六百八十七條 債權者カ現金支拂ニ代ヘテ證券ヲ引受ケント欲セ
サル時ハ裁判所ハ銀行ヲシテ其賣却ヲ爲サシメ又ハ執達吏ニ其賣
賣ヲ委任ス可シ

第六百八十八條 有價證券カ所持人式ニ非スシテ債務者ノ記名式ニ
係ル場合ニ於テハ裁判所ハ現金支拂ニ代ヘテ證券ヲ引受ケタル債
權者ノ申立又ハ其證券ヲ銀行ヨリ得取シ若クハ説賣ニ因テ得取シ
タル第三者ノ申立ニ因リ得取ニ付テノ證明書ヲ之ニ付與ス可シ又
其債權者若クハ第三者ハ此證明書ニ基キ管轄官廳又ハ證券ヲ發行



シタル銀行若クハ商事會社ニ記名ノ書換ヲ求ムル事ヲ得

第六百八十九條 有價證券ノ差押カ數名ノ債權者ノ爲ノニ爲サレタル場合ニ於テハ證券ノ價額カ該債權者ノ債權金額ニ滿タサル時ニ限り分配手續ヲ爲スモノトス

第六百九十條 金錢支拂ニ代ヘテ有價證券ヲ引受クルノ權利ニ付テハ前ニ質權ヲ得タル債權者ハ後ニ質權ヲ得タル者ニ先タツモノトス

第二款 債權及ヒ他ノ財產權ニ對スル強制執行

第六百九十一條 第三者(第三債務者)ニ對スル債務者ノ債權ニシテ金額ノ支拂又ハ他ノ有價證券若クハ有價證券ノ引渡若クハ給付ヲ以テ目的トスルモノ、強制執行ハ裁判上ノ差押命令ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百九十二條 差押命令ヲ發スル爲メ及ヒ此種類ノ強制執行ノ爲

ノ裁判所ニ任カセラレタル行爲ニ付テハ債務者ノ住所ニ因レル裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ハ執行裁判所トシテ之ヲ管轄ス又此ノ如キ裁判所ナキ時ハ第二十條ノ規定ニ從ヒ債務者ニ對スル裁判籍ヲ管轄スル區裁判所之ヲ管轄ス

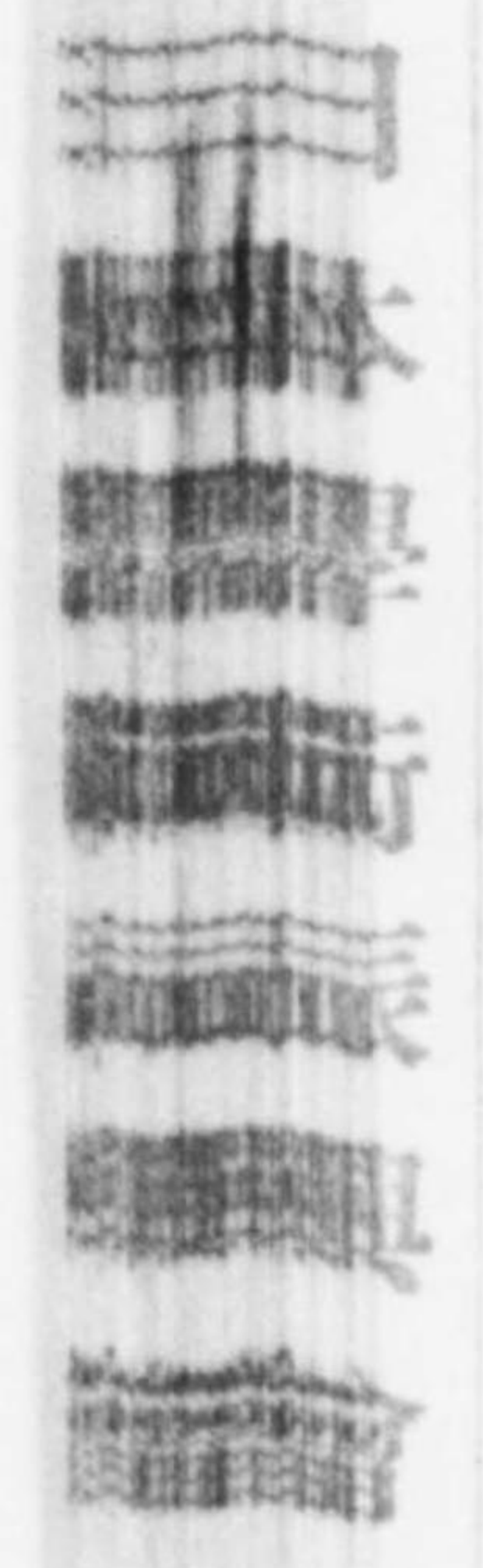
第六百九十三條 差押ハ第三債務者ニ對スル債務者ノ債權ノ中ニ付キ債權者ニ元金、利息及ヒ費用ヲ辨償シ且強制執行ノ費用ヲ償フ爲メ必要ナル金額ノミニ及フモノトス

第六百九十四條 差押命令ヲ發スルノ申請ニハ債權者ハ差押フ可キ債權ノ種類、數額及ヒ支拂期限ヲ明白ニ表示ス可シ

其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ提出スル事ヲ得

第六百九十五條 差押命令ハ第三債務者及ヒ債務者ノ審訊ヲ經スシテ之ヲ發ス

差押命令ニハ左ノ諸件ヲ包含ス



- 第一 執行力アル正本ノ表示
- 第二 債權者ニ屬スル債權及ヒ強制執行ノ見積費用額ノ明示
- 第三 差押フ可キ債權ノ表示
- 第四 債權者ノ債權額及ヒ費用額ニ相當スル金額ヲ債務者ニ支拂ハスシテ債權者ニ支拂フ可キ事及ヒ引渡シ若クハ給付ス可キ物ヲ債務者ニ渡サスシテ債權者ヨリ領收ヲ委任セラレタル執達吏ニ渡ス可キ旨ノ第三債務者ニ對スル催告
- 第五 債權ヲ行用シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ債權ヲ處分スル事ヲ得サル旨ノ債務者ニ對スル禁止
- 第六 第三債務者ニ對シ右ノ債權ヲ行用スルノ權利ヲ以テ債權者ニ右ノ債權ヲ轉付スル事
- 差押命令書ハ債務者及ヒ第三債務者ニ之ヲ送達ス可シ差押ハ第三者ニ對スル送達ヲ以テ爲サレタルモノト看做ス

- 第六百九十六條 債權者債務者ノ債權ヲ差押ヘタル時ハ第六百五十一條ニ有體物ノ差押ニ關シ定メタルト同一ノ効力ヲ以テ其債權ニ付キ質權ヲ得取ス
- 元金債權ニ付テノ質權ハ利息ニモ及ホシ繼續シテ取立ツ可キ債權額又ハ割拂ヲ以テ支拂ハル可キ債權額ニ付テノ質權ハ差押ノ後滿期ト爲ル可キ金額ニモ及ホシ又私ノ勤務ニ於テ雇ハレタル者ノ給料ニ付テノ質權ハ債務者力雇主ノ同一ニシテ増給轉職又ハ兼任ニ因リ得ヘキ收入ニ及ホス可シ
- 第六百九十七條 抵當債權ノ場合ニ於テハ債權者ハ債務者ノ承諾ヲ要セスシテ其債權ニ關スル質權ヲ記入簿ニ記入セシムルノ權利アリ
- 記入ノ申立ハ裁判所ニ之ヲ爲可シ其申立ハ差押命令ヲ發スルノ申立ト之ヲ併合スル事ヲ得



裁判所ハ差押命令書ヲ負擔アル不動産ノ所有者(第三債務者)ニ送達シタル後記入ヲ爲サシムル爲メ記入簿ヲ掌ル役所ニ必要ナル指圖ヲ爲シ且之ヲ執達吏ニ交付シ執達吏ハ囑託書ト共ニ之ヲ右ノ役所ニ提示シテ記入ヲ爲サシム可シ

若シ負擔アル不動産カ他ノ區裁判所ノ管轄地内ニ在ル時ハ執行裁判所ハ記入ヲ其區裁判所ニ囑託ス可シ

第六百九十八條 債務者ノ債權ヲ債權者ニ轉付シタル事ヲ差押命令書中ニ掲ケタル時ハ債務者カ債權者ニ債權ヲ轉付スル爲メ任意ニ公證書ニ於テ爲シタル陳述ニ均シキモノトス

第六百九十九條 債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書ヲ債權者ニ引渡スノ義務アリ債權者ハ差押命令ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債務者ヨリ取上ケシムル事ヲ得

債權者ヨリ委任セラレタル執達吏ハ動産引渡ニ關スル強制執行手

續ノ成規ニ從ヒ其證書ヲ取上ク可シ

若シ其證書カ既ニ執達吏ニ因リ債務者ノ方ニ於テ假ニ差押ヘラレタル時ハ一第六百四十九條第二項一執達吏ハ差押命令ニ基キ領收證書ヲ取りテ之ヲ債權者ニ交付ス

債權者ハ辨償ヲ得タル後證書ヲ債務者ニ返還ス可シ但第三債務者カ其義務ヲ履行シタル爲メ債權者ヨリ其證書ヲ第三債務者ニ交付セサルヲ得サル時ハ此限ニ在ラス

第七百條 爲替證券及ヒ此ニ類スル證券ニ因レル債權ニ付テハ差押命令ハ執達吏カ債務者ノ方ニ於テ證券ヲ假ニ差押ヘタル後ニ非サレハ之ヲ發スル事ヲ得ス

債權者カ差押命令ヲ發セシメタル時ハ第六百九十八條ノ規定ヲ適用ス

第七百一條 質權又ハ優先權ニ基キ債權ノ目的物ニ付キ優先ノ辨償



三井物産銀行
チ訴テ以テ請求スル第三者ノ權利ニ關シテハ第六百五十二條ノ規
定ヲ準用ス

第三者ニ所有權又ハ質權ノ關スル債權カ差押ヘラレタル時ハ債務
者ハ遲滞ナク第三者ニ其差押ヲ知ラシムルノ義務アリ若シ債務者
カ之ヲ知ラシムル事ヲ怠リタル時ハ第三者ニ對シ此カ爲メ生シタ
ル損害ノ責ニ任ス

第七百二條 差押ニ從ヒ第三債務者ヨリ債權者又ハ執達吏ニ爲シタ
ル給付ハ第三債務者ヲシテ債務者ニ對スル己レノ義務ヲ免カレシ
ム

差押ニ戻リテ第三債務者ヨリ爲シタル給付ハ差押ヲ爲サシメタル
債權者ニ對シ法律上ノ効力ナシ此場合ニ於テハ第三債務者ハ給付
カ不代補物ノ引渡ヨリ成ル時ハ此カ爲メ債權者ニ生ス可キ損害ヲ
賠償スルノ義務アリ

第七百三條 第三債務者カ支拂フ可キ金額ヲ債權者ニ拂フ時ハ其債
權者ハ債務者カ支拂金額ヲ受取ルニ際シ爲ス可キト同一ノ方法ヲ
以テ第三債務者ニ受取證書ヲ付與スルノ權利及ヒ義務アリ
第三債務者カ引渡ス可キ物ヲ執達吏ニ渡シタル時ハ執達吏ハ差押
物ノ競賣ニ關スル成規ニ從ヒ其物ニ付キ處分ヲ爲ス可シ
第三債務者カ引渡シ又ハ給付ス可キ有價證券ヲ執達吏ニ渡シタル
時ハ執達吏ハ其現狀ノ届書ト共ニ之ヲ裁判所ニ差出シ其裁判所ハ
差押ヘタル有價證券ノ引渡及ヒ賣却ニ關スル成規ニ從ヒ其有價證
券ニ付キ處分ヲ爲ス可シ

第七百四條 債權者カ差押命令中ニ包含セル給付ニ基キ第三債務者
ニ對シ訴ヲ起スニ至リタル時ハ普通ノ例規ニ從ヒ管轄ヲ有スル裁
判所ニ其訴ヲ起シ且債務者ノ住所知レタル時又ハ其内國ニ在ル時
ハ裁判上其訴訟ヲ之ニ告知ス可シ若シ債權者其訴訟ノ告知ヲ怠リ

タル時ハ争訟ヲ開始スル事ヲ得ス

第七百五條 債權者カ債權ヲ行用スル事ヲ怠リ若クハ訴ヲ以テ其債權額ヲ取立ツル事ヲ怠リタル時又ハ其責務ニ背キ交付セラレタル證書ノ返還ヲ遲滞シタル時ハ此カ爲メ債權者ニ生シタル損害ノ責ニ任ス

第七百六條 債權者ハ差押ニ因テ得取シタル權利ヲ拋棄スル事ヲ得然レ共此カ爲メ其請求權ヲ害セラル事無シ但差押ノ費用ハ其債權者ノ負擔ニ歸ス
其拋棄ハ裁判所ニ届書ヲ差出スヲ以テ之ヲ爲ス但其原本ハ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達ス可シ

第七百七條 下ニ記スル債權ハ之ヲ差押フル事ヲ得ス

第一 民法ニ依レル養料

第二 債務者カ義捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈善ニ因リ受クル繼

續ノ收入但其收入ハ債務者自身及ヒ其家族ノ生計ノ爲メ必要ナルモノニ限ル

第三 疾病、罹災又ハ死亡ノ爲メノ貯金預所ヨリ受取ル可キ金額

第四 士官及ヒ文武官員ノ給料但吏員ノ如キ確定ナル地位ヲ有セサル者又ハ一時ノ需要ノ爲メ公務ニ従事スル者ヲモ包含ス

第五 右ノ者ノ恩給金及ヒ年金

第六 手工補助人、職工又ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲メ受ケタル報酬但報酬權利者カ其勞力又ハ役務ヲ以テ全ク其生計ヲ立テ又ハ主トシテ其生計ヲ立ツル時ニ限ル

第七 官廳ニ寄託シタル身元金又ハ保證金

第八 特別ノ法律ヲ以テ差押ヲ禁シタル債權

第七百八條 一个年以上私ノ勤務ニ於テ罷ハレタル者ノ給料ハ執行裁判所ニ於テ扣除スルヲ得ヘシト定メタル額ニ限り之ヲ差押フル事

ヲ得

第七百九條 債權ヲ既ニ差押ヘタリト雖モ他ノ債權者ノ爲ノ其債權ヲ差押フルノ妨ケト爲ラス

第二以後ノ差押及ヒ其後ノ手續并ニ數名ノ債權者ノ爲ノ同時ニ爲サル可キ差押ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用ス但下ノ數條ニ於テ異ナリタル規定ヲ揭ケタル時ハ此限ニ在ラス

第七百十條 金錢ノ債權力數名ノ債權者ノ爲ノ差押ヘラレタル時ハ第三債務者ハ其實務ヲ履行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ債務額ヲ預クルノ權利アリ

若シ第三債務者カ此權利ヲ行用セサル時ハ其債務額力該債權者ノ債權金額満^ニタル場合ニ於テ差押ヲ同時ニ爲シタルト又ハ之ヲ順次ニ爲シタルトニ從ヒ各債權額ノ割合ニ應シ又ハ差押ノ順序ニ從ヒ債權者ニ辨償ス可シ

第三債務者ハ其關係債權者ノ一人ノミノ求ニ因リテモ亦債務額ノ裁判上ノ寄託ヲ爲スノ義務アリ

第三債務者ハ債務額ノ寄託ヲ爲スニ際シ其現狀ヲ裁判所ニ届出テ且其送達セラレタル差押命令書ヲ差出ス可シ但其届出ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得

第七百十一條 有體物又ハ有價證券ノ引渡又ハ給付ニ關スル債權力數名ノ債權者ノ爲ノ差押ヘラレタル時ハ第三債務者ハ關係債權者中ノ一人ノ名ヲ以テ最初ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ其物又ハ有價證券ヲ引渡シ且其現狀ヲ執達吏ニ届出テ其送達セラレタル差押命令書ヲ之ニ渡ス可シ

執達吏ハ數名ノ債權者ノ爲ノ差押ヘラレタル物ノ競賣ニ關スル成規ニ從ヒ其引渡サレタル物ニ付キ總テノ關係債權者ノ爲ノ處分ヲ爲シ且引渡サレタル有價證券ヲ現狀ニ關スル届書ト共ニ裁判所ニ

差出ス可シ

第七百十二條 第三債務者カ前二條ノ場合ニ於テ其負フタル債務ヲ履行セサル時ハ關係債權者ハ差押命令書中ニ掲ケタル轉付ニ基キ訴テ以テ之ヲ履行セシムル事ヲ得其他ノ各關係債權者ハ共同争訟人トシテ原告ニ加ハ、ルノ權利アリ

訴ヘラレタル第三債務者ハ訴ヲ起サス且共同争訟人トシテ原告ニ加ハ、ラサル債權者ヲ遅ク共口頭辯論ノ第一期日ニ原告ニ指名スル事ヲ要ス裁判所ハ右債權者ヲ共同争訟人トシテ訴訟手續ニ立會ハシム

此カ爲ノ發セラレタル裁判ハ總債權者ノ爲ノ及ヒ總債權者ニ對シ効力アリ然レ共第三債務者カ關係債權者ヲ指名スルノ義務ヲ怠リタル時ハ他ノ關係債權者ニ對シテ得タル利益アル裁判ヲ以テ右ノ債權者ニ對抗スル事ヲ得ス

第七百十三條 第六百九十一條ニ掲ケタル以外ノ財産權ノ差押ニ付テハ其財産權カ不動産ニ對スル強制執行ノ目的物タラサル時ニ限リ此款ノ規定ヲ準用ス

若シ第三債務者ノ有ラサル時ハ差押ハ債務者ニ處分權行用ノ禁止書ヲ送達シタル時日ヲ以テ爲サレタルモノト看做サル

裁判所ハ差押ヘラレタル權利ヲ換價スル爲ノ其場合ヲ情況ニ從ヒ必要ナル特別ノ命ヲ債權者ノ申立ニ因リ發ス可シ

裁判所ハ右ノ目的ノ爲ノ殊ニ收益權ニ付テハ其權利ノ管轄ヲ命シ又ハ其權利ノ移付カ許サル可キ時ハ其移付ヲモ命シ且移付ヲ執達更ニ委任スル事ヲ得

第三款 分配手續

第七百十四條 分配手續ハ動産ニ對スル強制執行ニ際シ裁判所ニ預ケラレタル金額又ハ有價證券ノ賣却ニ因リ得タル金額カ關係債權

者ニ辨償スルニ足ラサル時之ヲ爲ス

第七百十五條 裁判所ハ金額又ハ有價證券ノ寄託ニ際シテ差出シタル現狀届書ニ基キ十四日ノ期間内ニ元金、利息、費用及ヒ其他ノ附從債權ノ計算書ヲ差出ス可キ事ヲ各關係債權者ニ催告ス可シ
債權ノ爲ノ主張シタル優先權ノ届書ハ計算書ニ之ヲ添フルル事ヲ得

第七百十六條 十四日ノ期間満了ノ後裁判所ハ分配案ヲ作成ス
手續ノ費額ハ先ツ現在金ヨリ之ヲ扣除ス可シ又債權者ノ諸債權ハ其額ヲ各別ニ記載ス可シ
其末尾ニハ各債ノ債權ニ配當ス可キ金額ヲ明示ス可シ
十四日ノ期間ヲ遵守セサル債權者ノ債權ハ分配案ノ作成ニ際シ届書ノ包有事項及ヒ其憑據書類ニ依リ之ヲ計算ス但後ニ至リ債權額ヲ補充スル事ハ之ヲ許サス

民訴草ノ一六七

第七百十七條 分配案ニ關スル陳述及ヒ分配實施ノ爲メ裁判所ハ期日ヲ指定シ其期日ニハ債權者及ヒ債務者ヲ呼出ス可シ但債務者ノ所在不分明ナル時又ハ外國ニ在ル時ハ呼出ヲ爲ス事ヲ要セス
分配案ハ遅ク共期日ノ三日前ニ當事者ニ閱覽セシムル爲メ裁判所書記局ニ之ヲ備置ク可シ

期日ニ出頭シタル各債權者ハ他ノ債權者ノ債權及ヒ他ノ債權者ノ主張シタル優先權ニ對シ異議ヲ申立ツルノ權利アリ

第七百十八條 若シ期日ニ異議カ申立テラレサル時ハ分配案ノ順序ニ從ヒ財團ヨリノ支拂ヲ以テ各債ノ債權ヲ濟済スル事ヲ得ヘキ限リハ之ヲ濟済スル據其案ヲ實施ス可シ

第七百十九條 異議カ申立テラレタル時ハ各關係債權者ハ直チニ陳述ヲ爲ス可シ

當事者カ異議ヲ理由アリト認メ又ハ他ノ合意成リタル時ハ此ニ從

ヒ分配案ヲ更正シ及ヒ之ヲ實施ス可シ若シ異議カ完結セラレサル時ハ異議ヲ受ケサル部分ニ限り分配案ノ實施ヲ爲スモノトス

第七百二十條 期日ニ出頭セサル債權者ハ分配案ノ實施ニ同意シタルモノト看做サル

若シ期日ニ出頭セサル債權者カ他ノ債權者ヨリ起シタル異議ニ關係ヲ有セサル時ハ右ノ債權者ハ異議ヲ理由アリト認メサルモノト看做サル

第七百二十一條 異議カ期日ニ於テ完結セラレサル時ハ異議アル債權者ヲシテ債權又ハ債權ノ爲メ主張セラレタル優先權ノ正當ナル事ノ認諾ニ付キ關係債權者ニ對シテ訴ヲ起シタル事ヲ適當ニ定ム可キ期間内ニ裁判所ニ證明セシムル事ヲ命ス可シ但其證明書ハ分配手續ニ關スル記録ニ添フルモノトス若シ異議アル債權者カ其期間ヲ徒過シタル後ハ裁判所ハ異議ニ拘ハラスシテ分配案ノ實施ヲ

命ス

第七百二十二條 異議アル債權者ノ訴ニ付テハ分配手續ヲ開始シタル區裁判所之ヲ管轄ス然レ共爭訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサル時ハ其區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス

若シ數箇ノ訴力起サレタル時ハ之ヲ併合シ且各箇ノ爭訟物ヲ合算ス

第七百二十三條 訴力起サレタル時ハ通常訴訟ノ成規ニ從ヒ爭訟ノ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ其判決ニハ亦財團ノ係争部分ヲ如何ナル債權者ニ如何ナル數額ヲ以テ支拂フ可キヤチ定ム可シ

若シ其事ヲ適當トセサル時ハ判決ニ於テ新ナル分配案ノ作成及ヒ他ノ分配手續ヲ命ス可シ

第七百二十四條 若シ異議アル債權者カ口頭辯論ノ第一期日ニ出頭セサル時ハ異議ヲ取下ケタルモノト看做ス可キ關席判決ヲ發ス可